

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

特220

136

博士 松浦有志太郎

醫學博士 藤浪 鑑 著

醫學博士 富士川 游

醫學博士 三戸時雄

醫學上より觀たる公娼制度

廓清會本部發行

始





序



公娼制度が人道に悖り正義に反する施設たる事に反対する者は一人もありません。それにも拘らず人生の恥づべき制度が堂々と維持せられてゐる所以のものは、主として醫學上必要である、公衆衛生の立場から止むを得ない存在であるといふのが、社會一般の常識であります。併し乍ら斯ういふ學問上の問題を常識論で解決するのは申す迄もなく暴擧であります。我々は虚心淡懷専門家の研究に聽従し、學問の進歩と共に衛生的施設も適應發達せしめて行かなければなりません。

果して然らば花柳病學者は、現今の公娼制度に據る花柳病取締方針を如何に觀て居るであらうか。これは公娼制度の是非を決定せしむる最も重要な關鍵であります。而して文明諸國が各其國の代表的花柳病學者を派遣する國際花柳病豫防會議は實に左の如き決議をなしたてはありませんか。これは大審院の判決同様、公娼問題に對する醫



學上の最高審判であつて、何物の雄辯も以て之を覆すの道は無いのであります。

一九二五年巴黎  
國際花柳病豫防會議委員會決議

賣笑制度は、何れの國に於ても又何れの時に於ても、花柳病に因る危害を防止する  
事能はるしを以て、本委員會は次の二項を要求す。

一、賣笑制度の廢止

二、國民全體を對象とせる方策にして、個人の自由を主眼とせる方法の適用

以上二條の四博士の論文は、學界の權威がそれ／＼違つた立場から、公娼問題を  
論究せられたものであつて、  
私共は本書が幾分、  
首途に人道問題の解決の端を開くやうにならむことを熱禱して、敢て本集を刊行し、  
右の決議文を掲げて序に代ふる次第であります。

昭和二年二月廓清會本部にて

伊藤秀吉識

## 醫學上より觀たる公娼制度

醫學博士 松浦有志太郎

### 公娼廢止は理想論に非ず

公娼制度は人權を蹂躪し倫理を無視するものであつて、實に風教道德の上から視て  
容易ならざる惡制度である事は、申すまでもない事であるが、又醫學の方面より即ち  
公衆衛生上から視ても、其害惡を流布する事甚だ大なるものである。故に我々は多年  
此の公娼制度撤廢を呼號して居るものである。しかるに反對論者則ち公娼存置論者の  
多くは皆ないふ、公娼の廢止は誠に理想としては正當で、至極賛成であるが、併し現  
實は即ち必要であるを如何せん。而して余等の説を以て空論となし、現實の前に於  
て理想が何んの役に立つかと言はぬ許りの口吻であるが、此は餘りに現實崇拜に墮し

たる、俗惡なる頭の持ち主といふべきではあるまいか。私等は正當なる理想を以て、不都合極まる現實を破壊し、改革して行くのが即ち人間向上發展の道であつて、此の如くにして社會は改造せられ進歩するものであると思ふ。飲酒の如き有害無益愚劣極まる惡習慣でさえも、之を禁ずる事は容易の業ではない。多數の人を悪い習慣の束縛から解放する事は随分難い事であらう。併し乍ら之を多數國民の誠意に訴へ、之を國家の事業としてやるならば出來ぬ事はない。決して至難の事であり、不可能事といふを得ない。而も其が出來た暁には、即ち理想でなくて現實となるのである。奴隸制度の廢止の如きも随分と骨の折れた事業であつたであらう、其も出來ない間が理想で、出來た後は正しき現實である。何んぞ獨り我邦の奴隸制度、即ち公娼制度のみが不可抗力の現實ならんやである。何が故に彼等反對論者達は、此の不正不義なる現實を永久に固守せんとするのであらうぞ。現實を以て最大の權威あるもの、如く思惟して之に畏服し、之に屈從し、敢て之を改革せんと欲しないならば、如何にして我等人類社

會の向上進歩を期待すべきや、我等は斯の如き正しからざる現實が横行するが故に、大いに之に對抗する所の、正しき理想を鼓吹し、宣傳し、之を具體化して、以て彼の不正なる現實を破壊し盡さねばならぬのである。

### 私娼跋扈は公娼制度の失敗を證明す

醫學博士永井潜君は、數年前雜誌「新日本」に於て「歴史上には賣淫婦は古く希臘羅馬時代から存在したるものであるから、今日之を排除せんとするも至難の事であるまいか」と言はれたが、歴史が古いとて其が將來に向つて永久存在の理由となるまいと思ふ。古代野蠻時代に行はれた事でも、人智開發し、人權尊重さるゝ時代となりて、全く廢棄された事柄はいくらかもある。奴隸の賣買の如き其である。歴史が古いとて存在を主張する理由とはならぬ。

又私娼と公娼に關して氏は「取り締りの困難なる私娼の増加を來すよりも、公娼の

存在を認める外はないと思ふ」として私娼を拒ぐ爲に、公娼の認可を已むを得ざる代償物の如く考へられて居らるるが（之は獨り氏のみならず多數存娼論者の皆な高調する口實ではあるが）實際に於ては、公娼の存在或は新設は、私娼を減少せしめんとする目的の爲には何等の効果なく、反つて公娼を認可されたる土地に於て、其の爲に私娼の数が反つて激増し來る事は、實際を知る者の皆齊しく首肯する處である。即ち公娼の認可は私娼を奨励し、誘發するが如き結果を來すものである。遊廓が設置せらるれば其の附近の土地に於て、密淫賣婦も非常に増加し來りて、周圍の風俗も益々壞亂するに至る事は、到る所其實例を見るに難からざるのである。其は理論上からも當然であるべきものである、風俗壞亂の事を公然認可して、恰も正當の營業者なるかの如く待遇し、堂々とは行はしむる周圍に於て、夫よりも比較的罪淺き遠慮勝ちなる不品行、即ち密賣が発生し、又は増加し來るのも當然ではあるまいか。私娼を禁壓せん爲に、公娼を設くる等は、此こそ誠に油を注いで火を消さんと欲するの愚策である。倫理破

壞貞操蹂躪の事を公許して置いて、道德振興風教維持を講ずるも何の得る處があらう

### 性病の傳染率と公娼

猶一つの公娼存置論者の大なる誤謬は、公娼が衛生上花柳病蔓延を防禦すべき、有力なる防禦機關なるが如く主張し、又は信じ居る事である。世に斯の如き大なる誤解而して危険なる誤解はないであらう。試に思へ花柳病は今猶昔の如く花柳病ではないか、何が故に花柳病と名くるや、此れ花柳界より時々刻々に發生し來りて、危険を民間に傳播せしむるが故にかく名くるのである。花柳界とは遊廓である。遊廓の中心は公娼である。花柳病患者は遊廓の設置せられてある土地に於て、其地方に於て、其縣に於て、其府に於て、最も其の數の夥しきものなる事を事實は證明す。見よ全國年々の壯丁の花柳病患者數も、遊廓の設置多き府縣に於て其數最も多く公娼の存在せざる群馬縣、又は準廢娼縣とも名くべき和歌山縣の如きに於て、其數最も少なき事を。オ

し人公娼に對しては檢梅制度あり、驅梅院の設置ありて、以て公娼の花柳病を治療し幾分か其の傳染危険の程度を減却し居る者と思はゞ此れ全く實際を知らざる者の誤想であり。甚だ危険なる誤斷である。余の先輩或は同僚、友人又は門下生にして、檢梅又は驅梅院の醫務に従事したる者、又は今猶従事しつゝある者が少くない。余は其等の人に就て質すも、其等の人の努力が果して何れ程娼妓の健康を保證せるやを知るに苦しむのである。若し多少の効果は此の如き方法にて擧げ得るものとするも其は現今のやり方、現今の治療能力にては、極めて微々たるもので、實際の處信するに足らざる檢梅法に加ふるに、僅々の日數形式許りの入院治療を加へたりとて、全治して退院する者果して幾人あるであらうか。其成績知るべきのみである故に今日の檢梅制を別の言葉で云へば、恰も一ポンドの昇汞水を以て、太平洋の水を消毒せんと欲するに等しい方法であると云つても差支はない。

普通民間の患者ですら、花柳病に罹りたる者醫師に治療を請に來るも、其全治に至

る迄治療を持續する者は甚だ多からず、況んや彼等娼妓なる者人格も人權も蹂躪せられてあるが故に、自ら自暴自棄に陥り、身體を愛する念慮に乏しく、病に罹るも却つて自から隠蔽して治療を受けんとも欲せず、樓主なる者も亦彼等が長く治療の爲に職を廢するを好まざるを以て、治療の日數は全治を目的とする事が出來ない。況んや病院の設備と經費の限度とも、到底彼等をして全治的治療を受けしむる事を許さざる事遠きを如何せん。故に衛生上の必要よりして公娼を置き、以て遊蕩者の健康を保護し、以て家庭内への花柳病の蔓延を防禦すると謂ふも、此れ、全く頼むに足らざる事を頼む者である。否之れ實に薪を負ふて火を救ふが如き愚策である。眞に花柳病の蔓延を恐るゝならば、先づ公娼を廢止せよ、官許遊蕩練習所兼花柳病種繼所たる遊廓を全廢せよ。之れ實に、根本的花柳病撲滅策の上乗なるものである。

### 社會に及ぼす性病の慘害

獨逸伯林府の花柳病専門家ブラシユコ氏が四百八拾七名の花柳病患者に就きて其の感染源を調査したるに、其八拾一、一%は營業的賣淫婦より感染せしものなりと云ふ但し茲に營業的賣淫婦とあるは我邦の公娼とは類を異にするものなれど、警察の帳簿に記入せられ、衛生警察的の監視の下に在る點は同一である。

本邦に於ては先年我京都帝國大學醫學部皮膚科に於て、青島猪太郎氏が花柳病の感染源に就て、三百餘人の患者に就きて極めて注意深き方法にて調査せし事あり。其成績に依れば男子花柳病患者百人中六拾人強は公娼より感染し、残り四拾人弱は藝妓酌婦其他の密淫賣婦より感染せることを知れり。又全國各師團の衛戍病院入院病兵花柳病患者感染源の調査表に據るも、公娼が主要なる病原體なることを知るに難からず、(醫學博士山田弘倫、平馬左橋共著、統計より觀たる花柳病一〇三乃至一〇六ページ参照)

花柳病の禍害の如何に深酷なるものであるかは、諸君の已に知らるゝ所であらうと

思ひますが、余は次に醫學の泰斗フーフランド博士の言を譯出して、其一斑を髣髴せしめ様と思ふ。「凡そ人生に慘毒を逞うするもの、花柳病に若くものあらんや、生命の源泉に毒を注ぐものは唯々此病あるのみ、愛の甘き泉を毒して苦からしむるもの、此の病あるのみ、彼は人の種子を其の成らんとするに殺し、又は竊かに其種子の中に伏して害毒を後裔に及ぼし和樂幸福なるべき家庭團樂の圈内に闖入して、子を親に奪ひ、夫を妻に奪ひ、最も神聖平和なるべき人倫の紐を寸断にすと」此の一言中に花柳病の禍害を備さに云ひ盡されて居る、花柳病の禍害の戦慄すべきを知れる人々は、吾人と共に官許花柳病種繼所の撤廢の爲に、奮起せられん事を望むのである。

### 人間と動物とを同一視する勿れ

次に性慾問題に立脚して公娼存置論を唱ふる者がある。永井博士は曰く「性慾の抑制は第一人體に頗る有害であつて、其結果は往々にして神經的氣質的疾患を醸すこと

が多い。既に性慾にして抑制が不可なるものとすれば、公娼を廢止して多數の未婚者の性慾をして漏らす所なからしむる結果は、其害惡知るべしである」と此は頗る重要な問題である。抑も性慾の抑制が健康上頗る有害であるといふ事を、何處の何某が言ひ始めた者であるか私はよく知らないが、たゞ性慾關係の書物には往々そんな事を書いてある様である。又學者の中にも其を云ふ者がある。併し書物には隨分代々虚言を傳へて居る事が往々ある。併し第一の人がいゝ加減の想像説を書いて置くと、後の人は甲も乙も其を確定の事實なるかの如く書き傳へて、以てページの材料にする習慣がある。必ずしも深く其の眞否を極めない、無責任な事である。私は性慾抑制が健康を害すると言ふ事を、書物で見たり、人の傳へいふを聞くけれども、未だ嘗つて其健康を害されたといふ證明を見た事がないのである。性慾を抑制した爲に如何なる神経障害を發したか、如何なる病氣を發したか、私の多年の間の臨床的經驗に於て、左様な者とは遭遇しない。又自分の同僚友人等に左様の患者の經驗があるかと尋ねまして

も、性慾抑制の爲に健康を損害した患者を見た例を聞かない。

生理學者は何でも其處に器官があれば、それを働かせるのが當然であると思つて居られるかも知れない。併し人の働作はさう簡單には行かぬ。口があつても場合によりては三年も口を利かぬ時がある。爪がありても必ずしも引き抓いたり、搔きむしつたりせなくてはならぬ事はない。性慾も其通りで器官があつて、機能も完全であつても必ず其れをあるに任せて働かせねばならぬといふ次第のものではない。人は理性の指命によつて働くべきものである。御腹がすいたとて何物でも選ばず食するのは却つて飲食の目的に反する。

殊に人間と動物を一緒に考へる人があるが、私は人と犬馬と異なる處は、又性慾の關係に於て明かに分れて居ると思ふ。彼動物は一定の定まりたる時に性慾發動して、其時に可なりに強烈なものたる事は、已知の事實である。併し又其短き期間が去れば全く性慾に對して不感性で、中性の如くなる。實に奇麗なものである。併し人には左



様な定まつた期間はない、左様な自然の制限や壓迫はない。生殖器發育成熟の後には春夏秋冬四時何時でも其能力を表はし得るが、又何時でも是を止て居る事が出来る。年百年中止めて居て少しも不都合はないのである。従つて人に於ては性慾の遂行は、全く理性と意識の支配の下に行はれ、凡て其のあらゆる關係が不都合なく具備してから始めて隨意に之を行ふべきものであつて、自然から拘束さるゝ事なき代りに、自己の理性を以て節制するの自由を有するのである。而して抑制しても少しも健康障害は起らない。之に反したる場合、即ち抑制すべき時と場合に處して、抑制せざりしが爲に起る害は、實に甚だ大なるものである事は申上ぐる迄もない。其は實に健康上の損害のみならず、精神上、道德上、經濟上、社會上に於て殆んど大多數の禍害の原因は此の抑制を忽にするより起るのである。私は何が故に生理學者が獨り其の實例を見出さんと欲するも殆んど得る事能はざる程、其禍害作用の少き性慾抑制の害といふ事を、只に漫然と誇大し主張するか其意を解し得ぬのである。人間の健康に關して與り知る

ものは、生理學者よりも寧ろ臨床醫學に従事するものが親密である。然るに臨床學者は性慾抑制に原因する病氣を頓と見た事がないのに、生理學者獨り其害の恐るべきを主張するのは譯が分らぬ。

論者若し性慾抑制は甚だ困難なる事なり、容易の業にあらずと謂はば、余は暫く其に同意して、大に然りといふを辭せず。然れども抑制は有害なるものなり。其結果恐るべしと言ふに至りては、之れ寧ろ品行不正者が、品行方正者に對する恫喝的勸誘の如く響きて、余の甚だ首肯し能はざる處である、論者若し抑制の甚だ有害なるを主張せんと欲せば、先づ其の抑制の爲めに大に健康を害し、病を發したる患者の實例を列擧せざる可からず。且又人よりも遙に多く本能的に支配されたる動物、犬猫馬等に見るも、彼等例令人に拘束せられ其性慾を遂行する事能はざるも、健康の上に何等損する處なきに非ずや。

## 性慾亂用の惡習

余は上に述べて、性慾抑制が容易の事にあらずといふ點には暫く同意すと云へり。然れども私は抑制が容易の事にあらざるが故に致方なし、抑制するに及ばずといふの意にあらず。否余は人が人としての修養の第一義は、實に此の抑制にありと信するのである。自他の健康と利益と其他百般の善事に精進するの道は、實に此の抑制にありと信するものである。而して此の抑制たるや初めより之を心得て行ふに於ては、何等困難の事にあらず。たゞ一旦惡習に染みたる者、中途より之を抑制せんとする際、一時多少の困難を感じべきである。恰も酒と煙草の如く、初めより嘗て之を口にせざるものに於ては、飲み又は喫する事こそ苦痛なれ、毫も飲酒喫煙の必要を感じない。然れど一旦此の惡習に陥るや、之を禁せんとする際一時多大の忍耐を要するのである。而して已に幸にして惡習より離脱すれば、身神却つて爽快を覺え、健康を増加し來る

のである。性慾は飲食と違ひ、抑制は充分に出來る事である。故に性慾満足の爲めに犠牲機關を設けるといふが如きも又臨床醫學者の全く反對せざるを得ない處である。

性慾の人に於ては、其の發動して行く事情から觀察すると全く一つの習慣である。而も多くの人の場合に於ては一つの惡しき習慣であるに過ぎないのである。生理的的要等と云ふ事は少しも問題にならない。動物に於ては性慾は自然の天御に支配されてゐる。即ち極めて本能的である。本能的の壓迫とも言ひ得る。人に於ては總ての自由が段々發達して、従つて本能的壓迫から免るゝ事になつた。従つて性慾の事に就いても、只々本能の壓迫に盲從する事なく、理性の判斷によりて前後の利害等を打算してタトヒ如何なる本能の壓迫がありて、性慾が發動し來りても、只々其に盲從する事はなくなつたのである。此れ人と犬猫と異なる一つの點である。然るに幸に本能から免れ得た人は、茲に又思はず習慣と云ふ恐るべき力の束縛を受けて來た。前門に虎を防ぎ得て、後門より狼に乗り込まれた譬への如く、誠に油斷の大敵である。今や人間の

性慾の事は主として習慣に支配されて居るのである。而して其は多くの場合悪しき習慣といふを適當とする状態である。飲酒や喫煙の悪習慣に束縛せられておるのと同じ様に性慾の悪習慣に陥りてゐる人が多いのである。従つて生理的必要不必要の問題ではないのである。事實上より見て、多くの人は青年期、未成年期に於ては身を性慾に委ねない。結婚によりて始めて性慾的習慣に入るのである。併しながら、此の後に雖も非配遇的に性慾を行ふ事を決してしない。多くの男子及び殆んど最大多数の日本の女子に此の如き習慣を有する。此は誠に美なる習慣として推稱すべきものである。此が人間の標準であるべきでなくてはならぬ。此らの人は性慾の爲に害を受ける事は最も少ない。又一方多くの青年は未婚期に於て已に身を性慾に委ねる。而して其結果色々肉體的にも、精神的にも悪い影響を受ける。此の如き者が結婚をする。結婚をした後になりても、前の非配遇的性交の悪習慣からして、奇麗に離れる事をようせない。妻の病中、妻の妊娠中、乃至は旅行先き、又は其他の場合に於ても矢張り、非配

遇的性交の習慣を止め得ない。その結果花柳病を受けて歸る。隠蔽して居る。妻に傳染せしむる。子供に迄感染せしむる。又は遺傳的に不幸不具なる子供を産する。此れ皆な青年期、未婚期に於て習慣つけられたる性慾の當然の結果である。此は只に其の青年の一人の罪ではない。社會風俗の罪である公娼制度等を置くが如き、國是乃至國民、爲政治家の罪である。又彼の性慾遂行を青年等にそゝのかし煽動する所の、不謹慎なる學者の罪も決して軽くはないのである。飲酒でも喫煙でも、一旦其の悪習慣に陥りたりたる人は、其を必要だと感ずる。其を藥の様に思ふ。其によりて身體の元氣が回復せらるゝと思ふて居る。此は全く病的錯覺である。實際に於ては身體も精神も、飲酒喫煙の爲に段々と損害せられ、墮落して行きつゝあるのである。性慾の悪習に陥りたる者も、此と同様である。必要なるものゝ様に感ずるのは、習慣に依る錯覺に過ぎないのである。

## 有害無益の制度を撤廢せよ

性慾の本能は又精力即ちエネルギーと見る事が出来る。物質には物質的エネルギーがある如く、人には精神的エネルギーがあるのである。而して此のエネルギーの妙所は、隨所隨意に其の形態を變換する事が出来るのである。例へば物理學に於てはエネルギーは或は物體運動となり、又は分子運動、原子運動エーテル運動となり、熱力となり光線となるのである。必要に應じて隨所に變換せしむることが出来るのである。人のエネルギーも亦同様である。肉體の運動即ち勞働ともなり、智的運動となり學問に精を出し研究を積む事も出来る。藝術に身を委ねて其にエネルギーを傾注する事も出来る。只々性交一つを人間のエネルギーの放散方法と思ふ等は、愚味の極である。エネルギーを有意義なる事に使用する事を知らない、なまけ者の仕打である。俗歌に色男金と力は無かりけりとある。此が性慾必要論の結末である。徳川家康の養生訓と

言つた様なものを讀んだ事がありますが、其によると家康が狩獵の機能を説かれた所がある。狩は終日鳥獸を逐ふて山野を跋渉するから、體育に利益なる許りでなく、夜は快く疲勞してよく眠るから、又色を思はず性慾の事に遠ざかるが故に、大に身體養生に利益するものであるといふ意味の事が書いてありました。即ち山野を跋渉運動して、主としてエネルギーを其方面に放散すると、身體を強健にする利益がある。其上に性慾に遠ざかるといふ事が、又衛生上大なる利益であるが故に、一舉兩得の利ともいへるのである。此に反して性慾に身を委する事は、一舉兩損ともなるのであらう、金と力のなくなるのは當然であらねばならぬ。

之を要するに、花柳病豫防の關係より見るも、又性慾の方面より論ずるも、我邦の公娼制度なるものは、慥かに有害無益の惡制度である。然るに彼當路者は花柳病豫防撲滅の爲に此の制度を以て唯一無二の大策なるが如く聲明し、公々然として之を全國津々浦々にまで敷行し、國民を陥穽し風俗を破壊し、倫理を蹂躪して敢て顧みず、恬

然として耻ぢず、得々として職に忠なる者の如き態度を示すは、余の解するに苦む處なり。願ふに我邦政治家中眞の人物と稱すべき人の稀なるは誰しもさびしく思ふ所なるべし。否獨り政治家にのみならず我醫學者界に於ても、眞の人物らしき人物は甚だ稀なり。徒らに古人の糟粕を嘗め、又は因襲の舊套に面を覆ふて毫も自己良心の明鑑に質さずして、枝葉の末技を弄し、曰く檢梅驅梅の努力に依りて、若干の成績を擧げ得たり、此れあるが故に公娼制度は必要なり、古人が以て必要なる罪惡なりとなす、金言なるかな、名言なる哉と。必要なる罪惡といふ至極便利な詭辯を得て、以て金科玉條となし、此上もなく讚嘆して以て、自己の人格的位置の有り難い保證と心得てゐる。愚劣も亦こゝに至りて極れりと謂ふべし。而して一方可憐國民は、此の低級なる醫者の名説に聽從して、公娼制度を有り難いものゝ様に思ひ安心して陥穽に入り、花柳病の蔓延を彌が上にも蔓延せしめ、又其の片手間に風俗を彌が上にも壞亂せしめてゐるのである。嗚呼國を醫する程の醫者は何時になれば生れて來るだらうか。(完)

## 性慾と公娼制度

醫學博士 藤 浪 鑑

### 性慾は自然なり

青年と性慾。是程關係親密にして且其勢力の旺盛なるものは他にあるまじ。「陽氣發處金石亦透」と云ふ如く、新に噴火したる人間性慾の働くところ、殆ど何物も之を止め能はざる有様なり。我國には戀と云ふ言葉あり。屢々絢爛たる文彩もて品良く體裁好く飾らるゝも、其根本たり中心たるものは如何にしても性慾なり。諺に云ふ「止めて止まらぬ戀の道」或は云ふ「戀で通へば千里が一里」と。恰も、奔馬疾驅、川も溪も物かはと云ふ状なり。此の性慾を中心とする者の勢力が旺盛激烈なることは、古今も東西も人情の同じきところにして、而かも此性慾や、直に人心の極の自然より出でた

るものなり。性慾は青年に於て最旺盛なる如く、性慾は青年に於て最自然なり。青年は人間一生の中に於て恰、陽春三月の時代とも謂ふ可し。動物にして自然の兒たる人間が、此陽春三月の時代に於て、草木の花自ら開く如く、鳥獸の自ら相呼んで相戯る如く、盛に性慾の發動を見るは、當然の事に非らずして何ぞや。若、此事無くば其人は病的の人なり。玉の杯、底無き男なり。

性慾は人間に於て天與の利刃なり。此名刀の切れ味は青年に於て最善きなり。青年が之を用ふるは彼の自然の権力なり。而て之を善用すれば、己を利し社會を益し又子孫後世の幸福を來し、之を悪用すれば、己を害し社會を毒し又子孫後世の禍殃を遺すこは全く明白の事理にてあり乍ら。己の所持せる名刀利刃の爲に、却て己の身を傷くる青年の世に多きは、誠に寒心に堪へざるところなり。是れ、果して何の故ぞや。嗚呼青年よ、青年よ、汝、性慾を奈何せむとするや。性慾よ性慾よ汝、我青年を奈何せむとするや。

### 性慾とは何ぞや

性慾は如何にして生じ、又如何なる意味のものなるや。性慾は身體の生殖機關の發達と相俟つて發生するものにして、外部生殖器及び内部生殖器、殊に生殖腺の發達すること即ち、(男子ならば)辜丸に於ける生殖細胞即ち精子の生成、並に其射出の機關作用漸く完備することにつれて、所謂「思春期」の境に入り、其後も永く其状態を繼續す。而して人生に於ける嚴冬の候にも比す可き老年に入りて、上述の身體機關漸く萎衰すると共に、流石の性慾も終に減退し消耗するものなり。性慾が此生殖器殊に生殖腺即ち辜丸の働と密着關係を有することは争ふ可くもあらず。即ち生殖腺の分泌物(精液)が一種「内分泌」(分泌物質が血液に入りて、他の臟器組織に働を及ぼすこと)と見る可き働をなして、性慾發動に與て力あることは、敢て之を疑ふに及ぶまじ。精液長く儲留鬱積する場合に性慾高まり、精液漏出の後に此慾沈降するの事實は、此の

推理を助くるものと謂ふ可し。

然れども性慾を以て、直に全然生殖腺の作用なりとのみ考ふるは其當を得たるものならず。人間にても獸類にても生殖腺除去の後には此性慾消滅するやと謂ふに、敢て然るに非ず。辜丸剔出の後と雖、性慾の發動は尙止むこと無し。生殖腺のみが性慾製造處若しくは性慾誘出機關に非ることは、性慾の發動に就き腦髓の働の偉大なることによりても之を知り得可し。腦髓の何處かに性慾中樞と云ふ可きもの有りと思像せられざるに非ず。生殖腺の内分泌作用によりて、此腦髓の中樞が刺戟を受け感應發奮すると云ふことは、固より有り得可きこと乍ら、又人間は單に一の觀念によりて此中樞の興奮を起さしむ可きなり。性慾の發動に對し人間腦髓の作用與て大に力あることは、實に頗る注意す可き大切の事柄なり。

性慾と腦髓作用とが親密の關係あることは、是れ吾々人間の如き自然的に靈妙複雑なる腦髓作用を有するもの、己の性慾を取扱ふに當り、特に留意せざる可からざる自然の約束也とも謂ふ可し。而かも上述の如く性慾が生殖機關の作用と離る可からざる因縁を結べることは、亦固より明々白々なり此生殖機關の役目は何なるや、そは謂ふ迄も無く「生殖」の一事に在り。性慾の極致性慾の自然的目的が亦生殖の一事に在るは固より争ふ可くも無し。

### 性慾の目的は生殖なり

此性慾の極致とも又目的とも謂ふ可き生殖の一事は、總の生物に於ける最重要なる生活現象の一にして、生物は唯之によりて、己の種族の絶滅を防ぎ、又其繁殖を圖るを得るなり。總の生物に自己保存慾ある如く、不知不識の間に、亦種族保存慾あり、即ち、生殖慾あるなり。

吾人一たび此生殖の生理を知るに至らば、如何に造化自然の手の靈妙精巧にして其不可思議力あるに驚嘆するを禁せざる可し。人間に於ける生殖は實に一の男性生殖細

胞と一の女性生殖細胞とが結着合一することによりて行はる。男性生殖細胞は男性生殖腺にて完成せられたる精子、女性生殖細胞は女性生殖腺中に熟したる卵子なり。兩者が其生殖作用を営み得る資格を作る迄には、各其腺中に在て準備に準備を重ね用意に用意を積み、然る後に彼等は出動するなり。されば彼等は人間社會の未熟なる輕佻男女が、何等の用意も準備も無く浮氣のまに々々行動するが如きものにて非ざるなり。又男性生殖細胞は無數に排出され乍ら、之に合ふ可き女性卵子は唯一なり、是仲々娘一人に婿八人どころなる輕易なる競争に非すと云ふ可し。其無數の男性細胞の中にてよく此競争場裡の勝利者となりて眞に女性細胞と結着するものは唯一個のみなり。吾人此吾々の生殖細胞の行爲を観るに、眞に堂々たるものあり。彼等は準備を遂げたる後に於ても、尙競争あり努力あり、撰擇あるなり。薄志弱行的の人間が落花流水的に野合するが如きに非るを観る可し。加之、兩性細胞が相結合するや、其卵子はもはや己の周圍に狂ひ集れる他の男性精子の入ることを嚴格に謝絶し、一の卵子と一の精子

との眞に一身同體となることによりて、宇宙の大業なる生殖の務を始め、又之を完成するなり。實に彼等は明に貞節ある一夫一婦主義を行へり。且此際兩性の細胞は各全然同等の成分同等の資格を以て相合體するものなれば、彼等は人間社會にて男尊女卑や女尊男卑など、男女の罵り合ひ噪ぎ合ふを笑ふなる可し。斯くて兩性細胞の合體によりて生殖のこと成立し此合體の一細胞が無量の「エネルギー」を藏蓄し又之を開展し千變萬化など、云ふ形容にてはとても形容し盡さざる生長發育を遂げ、終に一人前の人間が出来上る其道程を追縦すれば、吾人は自然の靈妙と精巧とに驚嘆する外、更に又茲に如何に多くの秩序あり努力あり又倫理あるを看取す可きなり。

### 性慾は如何なる慾か

此生殖なる自然の大業を成すことは、確に人間性慾の極致なり又自然的目的なり。性慾の發動に由る行爲によりて實に此大切なる生殖は營まるゝなり。此大切なる生殖



の一事が人生に於て如何に大切なるかを思へば、單に是のみより見るも人は如何に性慾を取扱ふに慎重ならざる可からずやを知る可し。

然るに人生、人體には多くの缺陷あり矛盾あり。此缺陷と矛盾とは亦此性慾の領域に於ても現はる。性慾は人間の生殖を遂げしむる根本的自然的目的を有するものなるに拘はらず、人間に於ては生殖の慾と全く懸け離れて性慾ある有様なり。人屢己の意馬の狂奔に任かせ性慾の發揮を縦にし、之が爲に其根本的自然的目的なる生殖のこと之に従ひ來らば、却て之を厄介視し、甚しきは重大の犯罪行はるゝに至る。又然らざるも、一旦生殖のこと成就し(妊娠)、性慾の自然的目的既に達せられたる後に於ても、其人間は尙己の性慾の發動發揮を禁じ得ざるなり。此點に於て街路の狗は人間よりも遙に行儀良しと謂ふべし。人間は誠に放埒なる動物なる哉。

此議論と慷慨とは今姑く之を措くとして、青年實際上の問題には、「生殖」を離れて「性慾」を觀察せざる可からず。

性慾は如何なる慾を意味するやと謂ふに、之には種々の慾或は感情が包含されたるものと見ざる可からず。之に關して學者間の見解必しも一致せず、例之、モル氏の如きは性慾は「緊張解放慾」と「觸接慾」とより成ることを謂へり。又之に對して異説を挾める學者もあり。余は今茲に之を一々羅列するの要なしと思ふ、性慾は其中に異性觸接慾、摩擦慾等をも含み又視官、嗅官の感覺等も伴ひ、元來複雑なる内容を有す。而て就中、最も重要な奧義は特殊の性的快感を獲得せむとすにあり。此感の獲得は性慾に於て其核心をなすと稱し得べく、又此感には一種「緊張の解放」を伴ふものなり。此「緊張の解放」は即ち、生殖腺分泌液の射出を意味し、是、直に生殖作用に於ける重要な第一歩をなす、性慾の自然的目的が生殖に在るは之を見て亦明なり。然れども實際生殖を離れて尙性慾あり、而て性慾は種々の慾或は感情の綜合にして、人間に在ては純精神的感情も亦其中に存して、是亦輕からざる地歩を占むるものなり。性慾の眞正且十分なる満足と云ふことは、是等總の慾或は感情を満足せしむるに非れば不可なり

世に性慾の満足と稱するもの、必しも常に真正十分の満足と云ふに非ず。性慾の満足亦必しも容易なりと謂ふ可からず。

### 満足の方法と其利弊

性慾の満足。誰か之を容易なりと云ふや。男子若、其生殖機關完成したる時期に於て、皆直に其配偶を得、婚姻を結び婚後善く性慾の衛生守られなば、天下は誠に太平なり。鼓腹擊壤の民は斯の如かりしなり。日出而作、日入而息、鑿井而飲、畊田而食ひたる堯舜時代の人の子は斯の如くにして幸福なりしならむ。

人間の文明進み、世上の事業複雑となるにつれ、或る社會階級の青年男子は最早、斯く太平樂に非る境遇に置かるゝに至れり。彼等身體の生殖機關は完成し、其性慾は張り切る許に發奮す、然かも彼等の境界は彼等をして直に君子の好述を得るを許さしめず。是に於て彼等は寥寂の感に打たれ、悶々の情に苦むなり。輾轉反側して寤寐安

からざるなり。嗚呼此寂寥の感と悶々の情とを奈せむや。

是に於て性慾の發動のまに、之を満足せしめんとするの行動は、屢配偶無き青年の間に行はるるに至る。彼等は果して之によつて眞に彼等の性慾を満足せしむるを得る乎。彼等は恐らく之を知らざる可し。唯彼等は奮つて己の性慾發動を抑制する乎。然らざれば唯此行動を取る乎の外、他に其途を知らざるなり。即、一、手淫、二、私通、三、賣笑婦に戯るゝこと是れなり。(四、其他、病的感情若くは汚穢なる惡習慣に因る同性間の不良行爲に就ては今日之に説き及ぼさざる可し其不自然・不衛生・不倫理なるは謂ふ迄もなし。)以下之に就て一言す可し。

一、手淫 上述の如く性慾は種々の慾或は感情の綜合なれば、此方法は決して十分なる性慾満足の道に非すと謂ふ可し。手淫は性慾に起因する弊害中、最廣く青年間に蔓延せるものにして、種々の社會階級又種々の人種を通じて行はる。猿と雖も手淫を行ふことあり。飼養せらるゝ猿が時に盛に之に耽り、爲に身を亡すに至ることありと

云ふ。手淫の害毒は人の多く知るところにして、其過度なるに至つては終に身神の衰弱を來すこと復疑ふ可くもあらず。手淫の害に就ては醫家により之を頗る重大に見る人と、比較的輕易に考ふる人とあり。よし甚だ僅少の度数のもの未だ直に甚だしき悪結果を來すことなきにもせよ、又時として青年の手淫の爲に甚しく神経を衰弱せしめたるものが、其手淫其物の結果と云ふよりも其害を恐怖するの一念に因る方多き實例あるにもせよ、手淫は屢、習慣性をなして過度に陥り易く、又他人に此惡癖を感染せしむるものなれば、初めより此惡癖に染まらざるやうに注意するを要す。若しくは將來に於て此惡癖を遮斷するやうに意志の力を固くす可し。泰西の學者中（例之、ベルケル氏の如き）、若き男女は殆ど總て皆手淫をなすものなりとさへ言へるものあり。余は特に「手淫」と名づく可き行爲をなす惡習に染まらざる青年が我國に於て必ずしも甚しく稀有に非ざるを信する理由あり。手淫が青年社會に於て頗る流行せることは、事實なりとするも、青年が必ず此惡習に染まらざる可からずとする理由は毫末も有らず

且手淫が性慾の満足を十分ならしむる資格無きは前にも述べたる如し。而かも此愚なる舉動を取りたる報酬として青年身體の健康上に及ぼす不良影響の外に、己の劣情に克つ能はずして空しく其奴隸となりたりと云ふ悔恨は、多少にても思慮ある青年ならば、永く其心を惱ます基となる可し。

二、私通。此問題に就ては、私通と正當なる結婚とは何如なる相違ありや、如何なる結婚が精神上又肉體上最望ましきやと云ふことを論ぜざる可からず。又其議論は、頗る廣汎なる内容を有し、倫理觀の如何によりては、随分色々の説立てらる可し。余は今之に立入る時間なきによりて、此議論をなし能はずと雖、親しく知れる諸多の實例に徴すれば、自由戀愛など、綺麗に詩的に謂はれてゐる事柄の發生は、其多くは、思慮ありし結果に非ずして輕卒なりし爲に。沈着・剛毅・眞勇の精神より出でたるに非ずして浮調子なりし爲に。責任を重ずる心の産物に非ずして無責任なりし爲めに。結婚は如何なることを以て自己の爲め又社會の爲めに其要約とす可きやと云ふ見識を以

てするに非ずして唯無分別なりし爲に。又唯盲目的利己主義なりし爲に因るなり。因果應報は或は靚面に來り、然らざるも必ず將來に於て見らるゝものなり。一時の輕擧の爲に可惜有爲なる青年か、身體精神の向上發達を挫折せられ、金玉を空しく泥土に委ね去りたる實例は、誠に枚擧に暇あらず、痛嘆又寒心の至りなり。白樂天の女兒の淫奔を戒むる歌に「井底引銀瓶」あり。浮氣娘が青梅を弄し短牆に憑り、浮かれ青年が白馬に騎て垂楊に傍ふとき、牆頭と馬上と遙に相顧み、茲に性慾の感應ありし結果、其女は男を慕ひ奔て其男の内縁の妻となりたり。楊句の果て、不幸なる其女は恨悔し告白して云ふ、「爲君一日恩、誤妾百年身、寄言癡小人家女、慎勿將身輕許人」と。之は少女の爲めのみに非で、性慾の爲に身を誤り易き青年の爲めにも同様の誠なり。

三、賣笑婦。青年が性慾の發動に驅られ、之を満足せしめんとて、之れが爲に備はれる機關に入り込み、金錢もて此満足を買はんとするなり。果して十分なる満足を得

らるゝや否やは別問題として、彼等は之を得んと欲して金錢を費すなり。恰も料理屋に行くが如く、又有料便所に入るが如くに。

人之を以て需用供給の道理に因るとなす。方今社會の仕組は、男子の性慾を以て禁歌出來ぬものとして男子の婚姻以外の性交を以て止を得ぬもの若くは當然のこととなりとなすに在るが故に、賣笑婦は到る處に或は公認され或は默認されて群集し居れり。加之、彼等は頗る多數の場所にて公開せられ、絢爛たる裝飾は施され、歌舞音樂もて賑はされ、只管青年の情感を煽ぎ立てつゝあり。京都市の如きに於て、彼等は堂々たる市のお座敷の位置に陣取り、媚びつゝ同時に又威張りつゝあるなり。

### 恐るべき花柳病の蔓延

公娼設置の目的の主なるは、上述男子性慾の抑歌出來ぬものなりとの前提の下に、恐るゝ可き花柳病を豫防するにあるや疑ひ無し。此賣笑婦、殊に國家免許の公娼に戯

るゝことが青年の心理状態・倫理觀念又精神的作業力の上に及ぼす影響に就ては、今姑く論題外に措くとしても、公娼設置の重大目的なる花柳病豫防が果して其目的通り行はるゝや否や。こは國民的衛生の上より觀て、頗る、肝要なる問題なり。

之を信用す可き統計並に個々の實際例に徴するに、公娼が國民の花柳病蔓延に與つて力あることは、實に驚く可きものなり。公娼は他種の賣笑婦と共に花柳病蔓延の大大的源泉なり。而して此花柳病が國民の健康を害し、毒を子孫に遺すことの慘憺たるは、誠に戰慄に堪へず。花柳病とは通例、梅毒・痲疾及び軟性下疳を稱するものにして、此病の病理、並に之が如何に恐る可きものなる乎は、先年松浦醫學博士が我大學の特別講演に於て説述せられたるものありて其書物も既に數年以前に、出版せられたり、諸君が此書に就て閲覽せむことを望む。而して此疾病は殊に最も恐る可き痲疾や微毒の屢々頗る根治し難きものなることは、専門家の齊しく唱ふるところなり。彼の六百六號の始めて世に現はれたる頃に於て、此靈藥は一舉して世の微毒を全滅し數年

の後には世上復た、此惡疾の痕跡を留めざる可しとまで期待されたるが、今果て如何専門の大家なる松浦博士が余に親しく告ぐるところに據るも、六百六號により微毒を全治せしむるには患者の堪忍と思慮とを要請するところ甚だ多きものあり。六百六號世に出で、以來、世間の微毒の減退したる形跡を見るに由無しと。之によりても、人間の惡敵を退治することの如何に難きを見る可し。嗚呼此の惡鬼は花の顔もて青年に近き、青年一たび之に捉へられれば、彼は好んで血に入り、骨を侵し、屢々永く其毒氣を吹きて止まず、無瑕の美少年を化して汚醜敗殘の臭骸となさんとするに至る。曾て米國の醫科大學の臨床講義に於て、微毒皮膚炎の一患者を示し、其教授は學生に向つて曰く、余は北米全土に代へても、斯かる疾病の余が身にあるを欲せずと實に斯の如き感は屢々吾人の遭遇するところにして、而かも是れ多くは「自作孽不可逭」るものに原因し、若くは己の親の罪の報いなることを思へば、誠に嘆息に堪へざるなり。此忌む可き花柳病が如何に盛に蔓延せるやの一事に思ひ至れば、仲々に其人を叱責

するの餘裕も無き程にて、國民の健康を救護せむが爲に、其豫防を講ずるの急を感ずること益々切なり。

此花柳病の蔓延は我國にても亦泰西にても、仲々に恐ろしき程度なり。此事も亦松浦博士の書中に審なり。

此書中に引けるところに據るに、我國の陸軍、徴兵に於ても、壯丁が不合格となる原因の中に就て此花柳病は比較的大部分を占めたり。軍醫なる山田博士の調査に據るに、明治四十年十二月、第一師團第三聯隊の新入營者千三百二十四人あり此は徴兵検査に於て、既に一たび合格したるものなるや勿論なり。而して其入營に當り復之を検したるに、其一九・二%は花柳病に罹りたりと云ふ。松浦博士は徴兵検査の際に壯丁の尿中の「麻絲」を検したるに、其人員の五〇―六〇%に之を認め此人等は麻疾を有するものなるを知れり。松浦博士の門下なる月山・吉田氏が京都醫科大學醫院にて、麻疾の訴をなさざる各科の男性患者十五歳以上のものを調べたるに、二

百六十七人中、百五十人は麻疾あるを發見したり。

花柳病は如何なる社會階級の人を襲ふやと云ふに、實は上は貴顯の人より下は乞食に至る迄、殆ど總ての階級に浸潤せり、而して同じく松浦教授の門下にて青島氏の精緻なる調査に據れば、學生は、比較的其數の多きを示し「優勝の地位を占め」居れり。月山氏の報告に於ても、會社員や學生に於て著しく花柳病に罹れる割合の多きを見る可し。學生は未來の日本國の文明を背負て立つ可き人なり。斯人にて斯疾あるは忌はしき限なり。歐洲にても大學生の花柳病に罹る數の恐る可き程多きを指摘し、其豫防方法の講究の必要を叫べるものあり。我國の大學生は恐らく斯くの如きこと無かるまじきなれども、花柳病専門醫はやゝともすれば、余に告ぐるに學生罹病の傾向の増すのみなるを以てせり。學生の職分の貴きだけ、又花柳病の禍害大なるだけ、之は決して過眼雲煙視能はざる重要な問題なり。

## 公娼は花柳病の防波堤に非ず

此戰慄す可き花柳病の生産地は果して何處なりやと云ふに茲にも亦松浦博士の書を引用す可し。同氏の皮膚病花柳病學教室に於ける三百十人の患者に就て至つて慎重なる調査を行ひたる所(青島氏調査)に據れば傳染を公娼より得たりと云ふもの百六十三人。藝妓より得たるもの三十六人、酌婦より二十七人、密賣婦より四人、玉突・矢場・下女其他より三十四人、云々。其他、人の細君にして夫より受けたるもの二十二人もあり。單に此數字より見るも、檢微濟と稱する公娼が、如何に花柳病蔓延の大源泉なるやを知るに足る。此公娼の檢微なることが、花柳病豫防に對し、如何に微力なることは、所謂檢微方法の實際に鑑み容易に首肯し得らるゝところにして、之れ敢て檢微醫の罪には非ずして、實際の仕組が斯くの如くならざるを得ざらしむるなり。而して世間の人は此檢微あるが爲に却つて安心して行き行き、行きては羅り、羅りては又之

を他人に嫁せしむ。此公娼の如何に多くが花柳病患者なることは、最近大阪府立難波病院副院長中野氏の統計に據りても之を推測するに足る。氏は大阪府下に於ける公娼に就て多數の人員に基づき、多數の歳月に亘つて作せる精細なる調査の成績を報告せり、之に據れば公娼の花柳病數は最近十ヶ年間に大體に於て逐年増加の傾向あり、而して娼妓總體の七〇・〇%は微毒の潜伏期中、又現に微毒症狀を有するものと推定せしむと云ふ。此は唯微毒のみのことなるが、麻疹に就ては、娼妓總數の四二%に罹病患者たることを推定せしむと云へり。而して此等公娼の中、所謂無毒なる者はたとへ今日只今、尙未だ此等の花柳病症狀を出すに至らざりしとするも彼等は日一日、刻一刻新しき傳染を受くるに適するものなれば、彼等は終には悉く花柳病患者となると謂ふも、敢て誣言に非ざる可し。而して此花柳病患者は日一日、刻一刻、一方に妖艶花の顔もて可憐の青年を招き寄せ、他方には之に向ひ盛に其病毒を注射し之を天下に蔓延せしむ。彼等は如何にしても金毛九尾の妖狐なり。公娼既に斯くの如しとせば、所

謂私娼の中に病毒が如何に猖獗せるやも想像に難からず。又中野氏の調査に據れば、娼妓たらむとして未だ、娼妓たらざるもの、即ち娼妓の候補者に於ても、既に麻疹一〇・四%、軟性下疳四・九%、微毒一・七%ありしと云ふ。是れ彼等の新しき花柳病製造營業に入らむとする時の持參金なり。驚く可き哉。

### 賣笑婦に接する危険

賣笑婦に戯むるゝの危険は單に此身體的害毒を以てしても既に十分なり又十二分也而して人間の性慾の中には諸多の分子を包藏し、純精神的感覺をも入れるものなるが故に、此危険を冒してまで虎穴に入るの性慾的勇者(?)必しも常に虎兒を獲るあたはず、彼等は必しも常に人間としての完全なる性慾満足を得る事と云ふ能はざるが如し。又、人間にはなまじ此純精神的感覺あるが爲に、營業的性慾界に全く不似合なる方面の特殊なる禍害さへ醸さるゝことあり。況や其他の人事上・倫理上・精神上に於て、此

際幾多の惡報が可憐なる青年の身を苦しむるに於ておや。性慾の利刃が其所有者に崇ること村正の名刀以上なるものあり。

是に於て性慾界の餓鬼を濟度せんとする聲、叫び出されたり。性慾界の迷津に漂へる青年等には天上の福音として聞こゆ可し。曰く、青年の性慾は自然の事にして之は抑制す可からざるものなり。又之を抑制するは健康に害あり。而て公娼は天下御免の公娼なり、抑制す可きに非ざる性慾を懷ける青年が之に就て其性慾を發揮するは、彼等の自然にして彼等の自由なり。只彼等をして花柳病の感染を免かれしむる手段を取らしむ可し。其手段を彼等に教へ込む可しと。大學生も亦青年也。國家有用の材となる可き大學生には特に此豫防方法を授けて、以て此大切なる青年社會の健康を防護す可しとなり、斯の如きの言は殊に折々世の醫家より聽くところにして且、之は自己の淫猥生活を辯護するやうに聞こゆる人の口に出づるのみならず、又眞面目に民生の健康を憂ふる尊敬す可き學者にして亦之を唱ふるものあり。嗚呼此福音は青年に對し



て果して眞の福音なるや、性慾界の迷津に漂ふもの、果して之によりて眞の救済を受け得可きや。修養無く理想無き市井の匹夫に對しては、或は是亦一の善巧方便なる可しと雖、苟も、教育あり自重あり向上的理想あり精神的修養あり又之れある可き筈の大學の青年に對しては果して如何。之を福音なりとして隨喜の涙に咽むもの果して之れ有りや、若之れあらば其人多きや將た少きや、又之を我品性の侮辱なりとして斥くるもの果して之れ有りや、若、之れあらば其人多きや將た少きや。余は今俄に其答案を得んとして心急ぐにあらず余の今茲に語らんと欲するは唯次の事なり。此の世の仁人の青年に教へ込まんとする豫防法として實際如何程役立つものなるや心細く思はる理由決して少からず。余は此點に關しても、頗、松浦博士と意見を同うするなり。實に同氏も既に謂へる如く、斯かる豫防的用意を周到に調べ、恰、戰場に臨むが如き心地にて賣笑の巷に入り、以て身を保護せむとする位に思慮ある青年ならば其殊勝なる心掛けにて、己を斯る危険地に立ち入らせぬやうにするは寧、頗、易々たることなら

む。又人心の弱點として危険に接觸する動機の生ずるは、至つて屢々、不用意の間に在ることなれば、假令安全なる豫防法ありとするも、之れ更に間に合はぬこと仲々に多かる可し。誠に油斷も隙も無く危険千萬の話なり。

されば青年品性の問題を今姑措くとするも、花柳病豫防の最安全なる方法は、浮動せる性慾を懷て危険地帯に立ち入らざることなり。婚姻以外の性交を禁ずるにあり。之は最も平凡の説なり。然乍ら最確實なる道なり。或は陳腐の言ならむ、然乍疑も無く眞理なり。頃日余の知り得たるところによれば、獨逸國にて近年ライブチヒ大學醫科大學長ザットレル博士を團長として「獨逸醫家性慾倫理團」なるもの創立せられたりと云ふ。花柳病を撲滅する唯一確實方法は結婚まで性交を禁歇することなれば、婚姻以外の性交を禁歇するを以て此團體の目的なりとす。此目的を達せんが爲の事業として、醫科學生に對する講演及兵役に従事し居れる醫學生に對して警告檄文を送附すると云ふ。彼地に於て學生の間に花柳病蔓延すると云ふ彼國學者の報告に鑑み、斯か

る團體の發起ある所以も成程と首肯せらるゝなり。さるにても彼國にては花柳病豫防の器具など頗、廣く行き渡つて販賣せらるゝに拘はらず、花柳病の勢は依然猖獗なりと見ゆ。蓋、性慾は打算的のものに非ず、其發動發揮は勘定的を超越したる感情的のものなり。之を全く支配し得るは唯人間意志の力あるのみ。されば此間に勘定的打算的なる小刀細工を入れ、性慾より出づる餘弊を只之によつて救済し得ると考ふるは、餘りに樂觀過ぎ器械視過ぎたる話に非ずや。

### 制慾は健康に害なし

以上述べたる如く、青年が性慾の満足を求めんと欲して屢之に耽ける行動の、青年を危害に導くもの多しとせば、青年は此切つても切れぬ因縁ある性慾を終に如何せば可なるや。性慾は唯緊張する許りなり。人の子は益煩悶するのみなり嗚呼眞に如何せば可なるや。

早婚は固より不可なり。又一生を通じての絶對的禁遏は、唯特別の場合を除きては決して望ましからざるることなり、又生物生殖の大義に戻るなり。

男子は一定の年齢と一定の位置とに達しなば、必ず結婚す可きものなり。斯くて彼は性慾を完全に満足せしむるを得、且生殖の大義を全うするを得るなり。而て此際男子は女性の好配を得んが爲に、女子は己の良偶を選ぶが爲に、一種の意義ある競争起らざるを得ず。而し此競争が人生の進歩に資益するものなりとせば、此競争は人生の爲に慥に好事なり。是に於て優者は勝ち、劣者は敗れ、優者は配偶を得て生殖を遂げ其子孫を遺し、劣者は配偶を得ずして其種は消滅す可し。蓋、斯の如きは唯、理論上のことのみとするも、此優者たらむが爲に青年は努力す可きなり。努力せる青年が優者として好配を得るの希望多きことは、實際的に於ても固より明白なり。宋の眞宗皇帝勸學歌に「娶妻莫恨無良媒、書中有女顔如玉」と云ふ句あり。勉強して上達する男子は自、美なる好配を得可しと云ふ意にも解釋するを得可し。

然し人間の實際世界は、しかく單純のものに非ずして、萬事注文通りに事を運ぶと限ぎらず。幾多の矛盾や紛糾を提出するは誠に止を得ざるところなり。併乍ら男女成熟して一定の年齢に達しなば、必ず結婚すべきものなりとすることを以て、よし特別の除外例あるにもせよ、普通なる人間定則となす可きなり。「社會改良」は須く性慾問題を以て中心となす可し、従つて生殖を奨励す可し、従つて心身共に優良なる種族を蕃殖することを期すべきなり。而て人間結婚の後と雖、性慾の衛生・性慾の倫理と云ふことは、固より存するものにして婚姻によりて性慾問題が萬事完結せりと云ふに非ず。

性慾と生殖との間に若完全の調和あるものなりとせば問題は頗、簡單にして人生は餘程太平ならむ、然れども實際世界に於ては兩者の矛盾屢甚しきが故に、性慾を奈せむやと云ふ青年の煩悶は益大となるなり。

此性慾に關する疑惑の解明と、並に余が前に述べたる如き婚姻以外の性交を遮斷するを以て花柳病豫防の最良法とすると云ふことの裏面とは、懸つて次の問題の答案の上に在り。そは

「人間は婚姻を結ぶ迄性慾を抑制するを得るものなるや、又性慾抑制は果して人體の健康を害するなきや」

如何と云ふ問題なり。青年には假令「倫理」なる美名の下と雖人間性の自然に全然逆行するが如きことを強ふ可きに非ず、又是、到底不可能のことなり。又大切なる青年に對して其身體健康を脅迫せしむ可きに非るなり。人間・性慾は到底抑制し能はざるも又之を抑制するは健康に危害ありと云ふ前提が果して眞理なりせば、前に述べたるが如き性慾の満足を求むる行動は、之を是認せざる可からず。或は時に之を奨励せざる可からず。而して其實際の結果は如何青年の身體は羸弱となり、花柳病は益猖獗するのみなり。偶、智者ありて花柳病豫防法を青年に教へ込むと雖、未、十分なる完全を期し得られず、却て之によりて青年を誘惑し挑發して、危険地域に入るの機會を多

からしめんとす。青年の品性益崩壊せむとし、青年の感情は益荒まむとす。夫、人生には多く自然の矛盾あり、又岐路の暗黒あることを否拒す可からずと雖、而かも人生の大道とするところは慥に光明なり、常に調和なり。若、人間性慾は抑制す可きものに非すと云ふ前提が眞に眞理にして、人間の性誠に然なからざる可からざるものなりとせば之に遵ひたる人間の行動が人間を斯く危険に導くと云ふの理豈之れあらむや。人生には斯くまでに大なる矛盾あるを許さざるなり。然らば此性慾に關する前提は果して眞理なりや、人間の性の自然は此外に出るを許さざるものなるや。

### 節制危害説の誤謬

余は此問題に就て、確信と安心とを以て今、諸君に語ることを得るなり。幾多の實例に鑑み、又東西の多くの學者、殊に性慾學に就て研究せる學者の言論に徴し、余の以前より考へ居りたることは、益其確信を固むるのみとなれり。

余の確信するところに據れば、性慾の抑制は人間に於て必ず出來得るものなり、又出來たる實例は少からざるなり。世の獨身者必ずしも直に皆、性交禁斷者に非るは、言ふ迄もなきことなれども、眞に一代を通じて性慾を抑制し性交を禁斷することの人間に於て敢て不可能に非ざる事は之を明言するに憚からず、蓋し、性慾の抑制と云ふは、人間の心頭より性慾を全く打消し去るの謂に非ずして、彼の懐ける性慾をして跳梁せしめざるやう、又跳梁の結果なる性慾的不法行爲をなさざるやう己の意志にて抑制するを謂ふなり、意志ある人間は是れ必ず出來すと云ふ理由更になし。況や普通期待するところは、一生涯の間には非ずして、婚姻迄の抑制なり、又婚姻以外の性交を遮斷するにあり之が絶對に出來すと云ふ道理一も有ることなし。又之を實行したる青年は世に其類決して稀ならざる可し。

性慾の抑制が強て出來得るとするも、此事若し果して青年の身心に危害を及ぼすものなりせば、其抑制は決して好事に非ず。青年男子が婚姻まで己の性慾を抑制するこ

とは果して其身心健康を脅すものなるや如何。

是、青年性慾に關する實際問題に於て、最も重要な核心の問題なり。

是頗、熟慮を要する問題にして、人間には精妙なる體身機關を具備して其作用活潑に行はるゝの外、更に頗る複雑なる心理作用あるものなれば、身體内の諸官能相互關係を究めむとするには最、慎重なるを要す。人體の諸機關諸官能を最多く研究したるものは醫家なり。しかも人體の諸機關諸官能が一の遺憾なく悉く究明され盡せりやと問へば、之を然りと答ふる醫家は世にあらざるべし。従つて複雑なる性慾問題に就て種々見解の相違が醫家の間にあるも亦不思議に非ず。

余の確信するところに據れば、青年の性慾抑制は、普通の場合、斷じて其健康を害するものに非ず。之に就て余は次の如く考へ居るなり。

性慾抑制の害を謂ふ人は、屢、生殖腺分泌液の内分泌作用(上文参照)に其根據を置かむとせり。即、此分泌液中の物質は吸収されて腦髓中樞を刺戟し性慾の感覺を惹起

す、而て此分泌液徒に蓄積儲留して漏出するところ無くば、其吸収さるゝ物質の作用は益重疊し、是、一種毒物の如くに働くに至ると云ふ推測なり。此推測はさることにして、一かどの理屈あるやうに聞こゆれども、此健康體に於て生殖腺分泌液即精液の蓄積儲留する場合に其中の物質多量に吸収せられ此物毒作用をなして身體組織の健康を障礙すと云ふことは、果して學術上の證明を経たるものなりや、其身體組織の健康を害すと云ふも、果して何處の組織に如何様の有害作用をなすものなりや。吾人は總て之を知る能はざるなり。性慾の抑制に由りて生殖腺分泌液蓄積は之れあらむも、其液は此場合無制限に製出せらるゝに非るは事實の示すところなり。又其分泌液中の物質の吸収は之れあるべしと雖、之が果して身體組織に對し確に有害作用をなすやと云ふに、却て其反對を實驗したる學者あり。例之、辜丸の浸出液を試験動物體内に入れ其吸収に因りて、神經筋肉組織の動作を増進し疲勞を減却せしめたりと云ふ成績あり又或る學者はブオール氏の「スベルミン」(辜丸の浸出液より得たる物質)に就て研究し

哺乳動物に之を頻回持續して與ふれば、食思を増し體重を加へ傳染及び中毒に對する抵抗力を昂進することを謂へり。又他の學者にして、此「スベルミン」の無效又有毒なるを主張するものあり。但、斯かる種類の實驗は之のみを以て直に靈妙複雑なる人體の性慾生理に完結せる結論を立てしむるものに非ずと雖も、余が今此一、二を引ききたるは、人間に於て生殖腺分泌液の蓄積が直に有害作用をなすと想像する事の未だ承認されたる學說に非ざるを言はんが爲めなり。よし此蓄積儲留が有害作用を誘起するものなりと假定するも、健康なる青年は之に對して一種の安全辨と稱す可き、自然の排出作用を有せり。是は即、遺精なり。健康なる青年が僅少の度に於て遺精するは、是れ決して病的の現象と謂ふべからずして、寧、生理的と稱すべきなり。青年が僅少の度に於て遺精し、之に就て過憂するは理べきことなり。青年は屢此過憂の爲に却て健康を害するに至るものあり。此際適當の衛生的注意をなすならば、終に何の不良影響なくして經過し去るなり。

性慾の刺戟及發動に對して、腦髓の働大に與つて力あることは、上文にも既に述べたるが如し。若し果して性慾抑制が害ありといふこと真ならば、其主なることは、生殖器の作用よりも、余は寧、腦の働に結附きたるものとして之を考ふるが其主旨なりと信ず。夫れ人間の腦は其作用誠に複雑にして又靈妙なるものなり。今此腦の働に結附て性慾抑制の害ありとするならば、其害を解除し豫防するものも亦人間腦髓の働の分内の事と謂はざるべからず。靈妙複雑なる人間の腦髓の働に於て、是程の餘裕もなしとは決して信するにあたらざるなり。況や訓練を受けたる智識階級の青年の頭腦に於ておや。

### 性慾と食慾の相違

余は上文に料理屋、有料便所の譬喩を出したるが、世には性慾を以て食慾に比し或は糞尿排泄を欲するの感に比するもの實に之れあり。食に餓えたるものが是非食餌を

取らざるべからざる如くに、人間性慾の發動は決して抑制すべき性質のものに非ずと  
して、性慾の發揮者の爲に好個の辭柄を與ふる者多し。人間の自然性は果して眞に斯  
くの如きものなるや。余を以て觀れば性慾を以て食慾及糞尿排泄と同一視することは  
全然其當を得ざるなり。飲食や排泄は人間生れ落ちたる時より死に至る迄、一日も之  
を廢するあたはざるものにして、飲食を廢し排泄を止むれば其個體の生存は忽に危殆  
に陥るなり。人が此慾、此行動を抑制し能はざるは自己の保存の上よりも自然の眞理  
なり。性慾に至つては頗其趣を異にす。性慾は生殖の爲なり、事は種族保存に關して  
自己保存に關せず又生活中の一定期間の間のみ之れあり。斯かるものを以て食慾や排  
泄に比するは人生の自然を知らざる人の言なり。世に料理屋なくとも、人は飲食せざ  
るべからず、有料便所なくとも人は糞尿を排泄せざるべからず、獨、性慾は之を發揮  
するもせざるも銘々の勝手なり自由なり。誰が世に「有料性慾發揮所」あるは人間必然  
の需用に應ずるものなりと謂ふや。

性慾の抑制が少くとも思慮あり修養ある青年に取り、些少だも害ありとは如何にし  
ても信する能はず。世の醫家にして性慾抑制が神經に害ありとして、一定の患者に對  
し婚姻以外の性交を「處方」せむとするものあらば、余は此人が果して人間的並に學術  
的良心を以て之をなしたるやを疑はざるを得ず。假令特殊の場合に於て、此事一分の  
眞理を含蓄することあるにせよ、其由て來る弊害の多きを知らざる可からざるなり。

### 放縱は諸病の源泉

性慾に就て特に研究したる信賴す可き醫學者の多數は、皆性慾抑制の身體健康上に  
危害無きものなるを斷言せり。生理の上より、又おこがましけれども自分自身の經驗  
に由りても此事毫も疑の挟む可きもの無し。少くも精神的修養ある青年に於て、全く  
然るなり。「愛の衛生」を著はしたる有名なる伊太利のモンテガッツァ氏は曰ふ。「余は  
性慾的放縱の爲に極端の衰弱、白痴、痲痺を來したる多くの實例を見たり。余は此放

縦の結果たり得可き疾病を少くとも二十種算へ挙げ得るも、余は唯禁慾純潔なることに起因せる、唯一の疾病だに見たること無し」と。獨逸の衛生學及び生理學泰斗なるルブネルは曰ふ、「之を衛生の立場より觀て、人間は皆性交をなす可き必要決して有るものに非ず」と。佛國の花柳病學者なるフルニエ氏は曰ふ「人、青年に對し性慾抑制の害を説くものあり、是、輕卒にして又穩當ならぬ事と謂ふ可し。余は告白せむ。若、斯かる危害果して有りとせば、余は未だ、之を知らざるなり。又余は此領域に於て觀察を遂ぐ可き機會少からざるに拘はらず、未だ、醫家として斯かるものを見たること無し」と。瑞典のルンドの大學教授にして性慾學に造詣深きリッピング氏の如きも、亦此危害無きを確言せり。其他今一々其人名を枚擧するの煩をなさざるも、歐米諸國の諸大醫にして此性慾抑制の害無きを揚言する人頗多し。我國の松浦博士亦明に之を言ひ、余亦全く心より之と同意見なりと云ふの外無きなり。又以前のことなれども、先年諾威に於て醫科大學に向つて發したる問合せに對しクリスチアナ醫科大學教

授八人署名の上にて其回答を與へたるものあり。其回答の言に據れば「風儀良き生活並に性慾抑制が健康に對し有害なるものありとの說に對し、吾人の經驗の告白は皆一致せり。其は全然誤なることなり。十分純潔にして風儀良き生活より起因し得との主張を許す可き或は之をなし得可き、疾病若くは身體弱點あることは、其一つだも吾人の曾て知らざることなり」と。

### 制慾は人間の誇である

以上は單に身體生理の方面を主として論じたるものなれども、人間は唯之のみに非るなり。既に前にも言を挿みたる如く、性慾の發動に就ては人間腦髓の働大に與つて力あるなり、既に腦髓の働與つて大に力ありとせば、人間が己の性慾を始末するにも腦髓亦大に睨めざる可からざる道理なり性慾は生殖腺内分泌の自然の結果なれば我關せずなど、云ふ程に人間の腦髓は無責任に非る筈なり。



既に腦髓の作用與つて大に力ありとするならば、性慾抑制に關しても、腦髓の働如何即個人の精神状態如何によりては、其結果に若干の相違を來し得るや、亦想像に難からざるなり。余が茲に俱共に語らむとする青年は、教育ある青年なり、知識あり精神修養ある青年なり。他の教育無く理智無く情の動くまゝに身體を取扱ふ外無き青年野獸の如き青年、野獸の如き青年に於ても亦此性慾抑制と云ふ高尚なる事が理解せられ得る乎、又之を強制する場合に如何なる健康上の影響を及ぼすべき乎は、多少問題に非ずとせず。

性慾抑制は人間の自然に反すと云ふを以て、性慾抑制の不可なる理由とする人あり之に共鳴する知識階級の青年亦た甚多し。此人間の自然、即人間の本性を知得したるが如くに見ゆる怜悯なる言は、屢己の不品行を辯護する場合に使用せらるゝこと亦少からず。此點に於て人間は實に利巧なる動物なり。彼が智と辯とは誠に非を飾り諫を拒ぐに足るなり。されば惡魔「メヒストフェニス」は嘲つて言ふ（ゲーテのファウスト）

「人間は之を理智と名づけ、只管之を用ふ、斯くて彼はあらゆる獸よりも、より多く獸的とならんとするなり」と。然れども是、果して人間の自然性の全幅なりや。

人間の自然は固より之を重せざるべからずと雖、人間の自然性には二個の方面あることを知らざるべからず。人間は亦一の動物なるが故に動物共通の自然性を有すると共に、人間は最進化したる動物なるが故に、一切の他の動物には具有せざる若しくは未發展せざる自然性の方面をも有するなり。前者が人間の自然ならば後者も亦人間の自然なり。何故に動物共通の性質のみが、自然にして、其然からざるものが不自然なるや。豈斯の如き道理あらむや。學者はやゝともすれば動物共通の性質をのみ認めて之を人間の自然となす傾向あれども、折角進化して發展し來りたる性質にして動物を超越せるものは、是、人間に於ける特殊の自然性として、人間は之を尊重し、且益之を發達せしめざるべからず。此人間に固着せる特有の性質、即人間の自然性として、他動物に對し特徴をなすものを何ぞと云ふに、そは人間の軀體、血液の形態及生理的

性質に非ずして、實に全く人間の精神作用に有り。此精神作用に於て最も人間の特徵を示すものは、進歩なり、二は己を抑制する力なり。猩々と人間とは其身體の形態に於て酷似し血液の反應頗、共通類似の性質を示すなれども、猩々は何時迄も其生活状態變はるところ無し。之に反し人間は僅々二千年三千年の昔と今とは其生活状態に雲泥の相違を示せり。是、人間に特有の自然性なる「進歩」に因るなり、此進歩は全然精神的なり。又動物には唯利己あるのみ、己の慾の動くまゝに行動するのみなり。然れども、人間には利己の外に利他あり、克己、犠牲の精神の如きは唯人間のみの特性なり。是、人間に特殊なる自然性なり。人間は進歩したるものにして、今後も益進歩すべきものなり。此進歩は唯人間の精神的方面にのみ有るものにして、其益進歩するは人間に特殊なる方面に於てせざるべからず。人間が己の意志の力にて其性慾の發動、跳梁を抑制せむとするは人間の性質に於て敢て不自然のことと謂ふべからず。人間が能く之を爲すは、實に亦「人間的」なるに非ずして何ぞや。

人間は自然と逆行する能はざるものなり。猶、人間が鳥の如く飛ぶ能はず、魚の如く泳ぐ能はざるが如し。然れども人間の進歩的精神能力は人間をして常に必ず自然の奴隸たるに甘せざらしむるなり。自然に従ひつゝも亦自然を征服するを得るなり。人間が飛行機を發明したるは大空を征服したるものとも謂ふべく、其潜水艇を有するは海洋を征服したるものとも謂ふべし。性慾は人間の自然なりとの理由とて、唯其一面のみの奴隸たることが人間の自然性を盡したりとも謂ひ難きなり。

余は總て上述の言説を一括して謂はんと欲す。性慾を抑制することは、敢て人間の自然に反するものに非ず、人間は自然的に能く之をなし得べき人間的特性を具備するなり。性慾を縦に跳梁せしめ、之が發動の爲に人間に大切なる生殖的機關を濫用する事は百の禍害ありて一の利無し。性慾の抑制は人間に於て、殊に少くとも精神的修養ある青年に取りて、其身體に危害を來らすこと斷じて無し。青年が己の品性を重ずるを知り己の社會と己の後世とに負ふ責任の大なるを知らば、彼の國民健康を脅迫する

花柳病の如きものと絶対に没交渉ならざるべからず。彼の意志だに健剛ならば斯くするは彼に取て固より易々たることのみ。斯くて彼は婚姻に由て始て性交を遂げ性慾の衛生と性慾の倫理は永く彼の操守するところとなり、彼が好配は健康純良なる兒女を生み、彼が生殖作用は彼が家族と彼の國民とに無上の福利惠澤を來たさん。要は、青年が己の性慾を支配するにあり。

### 如何に抑制すべきか

然らば性慾は、如何にして、能く抑制するを得べき乎。茲にも青年の深く思慮を加ふべきものあり。性慾發動し、其將に絶頂に達せん迄之を増長せしめたる後に於て之を俄に抑制せんとするは稍難事なり常に其未だ斯く張り切らざる手前に於て之が方向轉換を行ふべし。性慾抑制の消極的方法としては、之を挑發する種々の惡刺戟を遠ざくるに在り。中間的方法として、運動、純潔なる快樂、清和なる家庭生活の如きは性

慾に其發動の隙間を與へざる頗る良好の方法なり。又之と共に、青年が各己の職業に興味を深くし、之に向て勉強努力することは、常に性慾抑制を容易ならしめ、極て好結果を來すものなり。積極的方法としては、人各其精神的、道徳的修養を積み、常に其心頭を清純和平ならしめ併せて其精神的勇氣養成せられ、之に頼て多くの誘惑に對する抵抗力の強堅となるを期す可きなり。余の確信するところに據れば、己の心の持ち方一つ、又己の居るところの境遇如何によりては、此等の効果を得ること、假令人皆聖人たらずとも人道學者たらず共、決して困難なるものに非らず、左程の苦痛無く和平の裡に性慾の抑制行はる可し。且、人此性慾に於ける精神的「エネルギー」を轉じて、之を他の有益なる「エネルギー」に移すを得て、之を使用する場合には、其人の精神的作業の能力の増進するものなり。此事は人或は不知不識の裡に行ひ或は力めて之を成し、其良結果を得たることは、屢、之を経験したる人の口より聽くところなり。之に反して、性慾の抑制が精神的作業の力を阻害すと云ふことは、亦屢々耳にすると

ころなれ共、若、果して此事ありとせば、こは慥に己の性慾統御法を誤りたるに因るなり。人、一方に於て唯益性慾を刺衝し興奮せしめ、其勢を馴致し、其の愈猖獗するに至て、始めて他方に於て卒かに強て之を抑制せむとするは、徒に腦髓の働きを困憊に陥れ、精神作用を昏迷せしむるものなれば、頗る愚と謂ふの外無し。

人間が性慾の奴隸となるは、動物的人間性の曝露にして、己の意志もて性慾を抑制するは、眞個人間的なる人間性の特色なり。彼は怯者、敗北者の事にして、此は勇者勝利者の業なり。嗚呼健剛なる可き青年、生氣満々たる陽春三月の如き青年は、怯者敗北者なる可からずして、必ず勇者、勝利者たらざる可からざるなり。(終)

## 醫學上より觀たる絶娼論

文學博士  
醫學博士

富士川

游

### 日本に於ける娼妓の歴史

日本に於ける賣笑婦の起原は何時であるか分らないが、奈良朝時代には已に存在して居たのである。有名な日本最古の歌集「萬葉集」は勅撰の和歌集であるが、其第八卷に遊行女婦と云ふ者の歌が載つて居る。萬葉集は本統の勅撰ではないと云ふ議論があるが、古今和歌集、又は他の二十一代集などの眞正の勅撰集にも之に類する者の和歌が載つて居る。此の遊行女婦は即ち當時の娼妓であつた。斯く天皇の勅命を以て撰集せしめた歌集に、娼妓の歌を麗々と載せて置くと云ふ様な國は世界中には餘りないと思ふ。

彼の有名な「源氏物語」や其他の著書にも娼妓の事が公然書いてある。又帝室の貴重なる官制とも云ふべき「公卿補任」と云ふ書物の中にも、母は某の遊女なりなどと憚らずに書いてある。大江匡房の著はせる「本朝文粹」にも遊女の作が載つて居る。帝王も關白も其遊女の許に往來せられたる事が立派に書いてある。のみならず其頃の宿々には淫賣婦即ち娼妓があつて、其に高貴の人々が通つて、之を妻にせんとしても、まさか其儘ではうまくないので、何時の間にか其遊女が某長者の娘分となつて、身分の賤しからぬ人が公然之を弄ぶといふ風になつて居る。彼の池田の「熊野」だの、大磯の「虎」など云ふ者は其例である。源義經の「靜」、後鳥羽院の「龜菊」なども其である。斯く雲上までも遊女が跋扈する様になつたから従つて弊害も多くなつたので、後には之を取締る事になつた。頼朝の時には清水の冠者と云ふを其別當に充てたのである。鎌倉から足利時代になつて世は戰國となつて頗る忙がしい時でも、遊女は矢張其間に横行して居た。そして武人が軍陣の間に之を弄んだのは、「虎」が頼朝の富士の卷狩の

時、工藤祐經の陣中に呼ばれて居た事實でも分る。然るに慶長十七年豊臣氏が京都に遊廓を造つて茲に遊女を置き、里見某を其別當に充て、取締らせ徳川氏の時に元和年中、遊女をば傾城町より外に出すことを禁する法律を作つた。若之を破つて、廓外に出す時は其者の家屋を沒收すると云ふ頗る嚴重な規則であつた。然し是は單に遊女即ち娼妓を監視するので、今日の如くに衛生的の組織とは少しく違つて居たのである。西洋にも娼妓はある。大層立派な衣服を纏ひ、公然と淫を鬻いだ者である。之を徳川氏の時の様に一定の場所に置いて身體の検査をなし、居住の制限を定めたと云ふ事は千六百八十七年の終り頃から、千七百九十八年まで、佛蘭西で行はれた。斯く身體と居住とに制限を加へて娼妓を取締ると云ふ事は二百年前に佛蘭西に始まり、後獨逸にも露西亞、奧洪國などにも行はれ、遂に世界に擴がつた者である。

### 娼妓は社會に必要なりや

欺くの如き賣笑婦、遊女、又は娼妓は果して社會に必要な者であらうか、或は不必要であらうか。又之を勦絶する事が出来ようか、或は出来ないかを考へて見るに、私は勿論不必要な者で、是を絶滅せしむる事は必ず出来ると云ふのである。廓清會の主張は先第一に娼妓を國家監視の下に一の營業として取扱ふ制度を廢止しようと云ふのであるが、私は尙一步進んで單に制度のみならず、賣笑婦なる者を根底より絶滅せねばならぬと思ふのである。其には第一道德上から之を考察し娼妓が果して有益な者であらうか否かを研究し、第二に法律上から果して之を廢するのが正當であらうか否かを考へ、第三には醫學上から今日の制度が無害有效であらうか否かを察し、其結果到底之が存在を許すべきものでないと云ふ事に歸着し、今や已に萬國同盟まで出来て居るのである。そして單に制度を廢しようと云ふのではなく、絶對に賣笑婦其物を根絶しようと云ふ議論になつたのである。即ちマイエルは法律上から國家監視の下にある賣笑婦を攻撃して居る。又他の學者は醫學上から國家監視の下にある娼妓は有害

無益であるから之を廢止すべき者であると論じて居る者もあり、道德上から之を論じて、斷じて許すべき者に非ずと斷定した者もある。然し其には又反對の意見があつて法律上からも、道德上からも宜しくないが、娼妓なる者は社會に無くてはならぬ者とするれば、已むを得ず之が取締りを嚴重にして、其れが爲に蒙る病毒傳播を防ぐより外はないから、國家が之を監視するのは必要であるとして居る。是が今日國家が公娼制度を設くる最大理由で、露國のバルモンスキーなどの説が是である。即ち道德上法律上から論ずれば元より悪いには違いないが、之を保存して置くのは衛生上已むを得ない事であるとするのである、が此種の議論に對して吾人の考は簡單である。即ち娼妓を公許して置けば、花柳病撲滅の問題の解決さるゝ時代が来るであらうか否やの問題に歸着とするのである。

### 娼妓監視の方法

先娼妓監視の方法を見るに列國區々であるが、之を大別すれば五通りになる。其第一の方法は一定の家があつて其家の主人に抱へられて賣淫を営ませられて居る法。之はボルデルシステムと云ふ。第二は一定の家はあるが、主人に抱へられて居るのではなく、自分の意志で自由に營業をして居る。之をローテルシステムと云ふ。第三は自分の家に住んで居ても、主人に抱へられて居るものも、抱へられないでも、一定の廓内より出てはならぬとして、其内に閉ち籠められ、政府の監視を受けて居るもの。ブレイメン、ハンブルヒなどが此法を用ひて居る。第四は娼妓は何處に住んでも構はぬ。唯一定の市街には決して入つてはならぬと云ふ制度を立て、居るもの、獨逸の伯林などが其である。何々の町には娼妓は出てはならぬ、其外の市街には居てもよいとするので、日本なら銀座通りにばかりは出てはならぬと云ふ様に定めて居るのである。第五は絶対に不可ないとする者、米國紐育、市俄古などが其である。そして監視の法も大抵警察が監視する様になつて居て、花柳病の治療も行政的に受けさせて居るの

である。斯く警察が監視し、或は丁抹、紐育などの様に絶対に禁止しても果して花柳病が蔓延しないか否か。是は重大な問題である。如何となれば今より卅五年前に痲病の微菌を發見した獨逸のプレスラウの大學の微毒専門の博士イツセル氏はプレスラウの市で、娼妓の微毒を檢查した時に痲病を發見したのであるが、此人の説に據ると検査に由つて痲病患なりや否やを明かに斷定するには顯微鏡の検査をなしても、大概九十プロセントまでの病人を見逃すと云つて居る、然るに今日の検査は極めて簡單である。是は事情已むを得ぬ事であるが、顯微鏡の検査をなしても尙百人中九十人は之を見逃す様になると云ふに、顯微鏡を用ひざる極めて簡單なる検査法では殆んど絶対に花柳病患者を見出す事が出来ぬであらう。故に今日の微毒の學問を専門となして居る人は、今の検査は有害無益であると斷定するのである。そして伯林大學のブラシヨ―又は佛蘭西のピアオなども之を賛成して居る君斯坦丁斯堡のジェーリンと云ふ人は極めて多數の材料で研究した人であるが、此れも検査は廢めた方がよいと云つて居る

獨逸伯林大學の花柳病専門の學者プロツホと云ふ人は性慾一般に就いて研究した人で千九百年に「英國の賣娼婦」と云ふ書を著した。其中に醫者が唱へて居る國家監視法を賛成した説があつた。然るに千九百八年に本人が書いた書物の中には、國家監視法は甚だ宜しくないと考へ、遂に絶娼論となつて、明かに前説の誤りを説いて全然反對の結論をなして居る。プロツホは十年間研究を積んだ結果、賣娼婦は人間に避く可からざる者であると思つて居たが、之は間違つて居る。「全く絶滅すべき者である」と明言して居る。私も此説には同感である。醫學の大家で花柳病の大家ブラシコーにしろ皆絶娼論者である。伊太利のロンプロゾーなどは「賣娼婦は先天的犯罪者であるから、之を國家で監視するのが必要である」と云つて居る。

### 統計はあてにならぬ

果して衛生的の監視が有害で無益であるかと云ふに、全くそうであると云はねばな

らぬ。統計表によつて監視制度を廢めた爲に花柳病が増したか、又は減つたかを断定する事は甚だ危険である。例へば或國に於て賣淫婦の監視を廢めた所があると假定する。そして其後壯丁なぞの花柳病患者を統計に取り、其簡單なる數によつて其効力を云々することは全く危険である。如何となれば此の花柳病の蔓延は單に賣娼婦一人の爲ではない他に之が原因をなす者は澤山あるから、是に由つて其有効無効を断定せられない。我國の群馬縣などが其である。假へ群馬の様に公娼を廢しても、壯丁の花柳病患者は却つて増すこともあり、又少くなることもある。丁抹で娼妓の監視を廢めて了つたのは千九百六年であつた。所が其後微毒患者は多くなつた。そこで之は何に原因するであらうかを虚心平氣で調べて見たら、全く他に原因があつたとの事であつた。又千八百八十八年にクリスチャナで娼妓の檢微を廢めた所が、微毒患者は非常に減少した。是は婦人の微毒患者が自分から醫師にかゝつて之を治療したからであつた英國でも檢微を廢めたので千九百四年には微毒患者は一萬人中百八人に減つた其外ク



リスチャナなどの例を見ても微毒患者は檢微を廢した爲めに明かに減る。然し之は何か他に原因があるかも知れぬから、單に統計表のみを見ては何れとも斷定は出來ぬ。

### 檢微の無效有害

私は檢微なる者は何の利益もないと云ひたい。醫學に關係のない者は迂遠であると云ふかも知れぬが、實に檢微は害があつて益がないのである。其一つの理由は此迄の日本の調べによると、檢査せる娼妓の内三人目には必ず一人は痲病患者がある。然るに千八百八十九年には伯林の同患者は二百人中一人の割合になつて居る。是は獨逸では我國よりも衛生思想が進んで居るが爲に、娼妓は自衛上病を發見して之を治療するからである。然るにライブチツヒでは千九百二年の統計に據ると娼妓の花柳病患者は百人中に四人の割合であるが、學生の方を調べて見るに百人中二十五人の花柳病患者があるから、本家本元の娼妓の中に百人中四人のみであるとは實に疑はしい事で、全

く娼妓檢査の信するに足らざる事を證明して居る。伯林で登録されたる娼妓の数は三千七百人ある、之を檢査するに八人の醫師が三時間に完了すると云ふ事である。そうすると醫者一人で一人の娼妓を檢査するのが四分間である。獨逸伯林の檢微は立派に出來て居るとは云はれても僅かに四分間に一人の患者を檢査して其で病患者を發見する事は無理である。百人中九十人までは患者を見逃すと云ふのは尤もな事である。伯林では娼妓に注意書が渡つて居て、病毒を受けぬ様に豫防法を書いてあつて自分から病に罹らぬ様に注意をして居る。他の國に比すれば自衛は確かに進んで居るには違ひないが、二百人中一人と云ふ様に格外に患者の少ないのは檢査の手落ちである。其は一々顯微鏡檢査が缺乏して居るからである。然し之をするには一人には五時間六時間かゝる故に到底出來ない事であるから、顯微鏡を用ひないのであらうが、それでは檢微は何の利益もないのみならず、有害無益であると云つても差支へはない。尙檢微に付て此外の調べを綜合して見るに娼妓に對する衛生的の監視、花柳病の檢査は、其方

法が完全でない爲に有害にして無効になるのである。

尙婦人を檢査して、之に接する男子を檢査せぬと云ふ事も一つの缺點である。かゝる不完全なる方法で、九十プロセントは見落とすと云ふのに、之は檢査をして置くから安全であるとの保證を與へて世に立たせて置くが、其實は病毒を持つて居る者であるから、檢査をなすが爲めに却つて害を與へると云ふ事になる。故に檢査なる者は全然廢して終つた方が宜しい。プロツホ其他の數多の醫學の大家が唱へた説が是である。少し此説を柔かにして之に學理的の改良を加へやうとするのがナイセル先生などの議論である。然し此人々も結局は一種の絶娼論である。兎に角今日の醫學上から見て公娼を置くと云ふことは甚だ悪い事である。

### 尙畏るべき變性

尙又賣淫と云ふ事に於いて他に重大なる害がある。夫は此事が身體の上に及ぼす變性の働きである。是は前に述べた病患よりも尙一層患ふべき現象である。私は其害の畏ろしき事を見て茲に「絶娼論」を唱へて、之が全滅を期したのである。賣淫は之を行つて居る間に自分の身體に變性を起すことである。然して此の變性者が多くなれば、社會は遂に衰へ且つ滅亡するに至るであらうと思ふ。其變性とはどんな者であるかと云ふに、第一に賣笑婦の行爲を長く行つて居ると女が男になつて了ふ。男になると云つても眞の男になるのではない男にも非ず女にも非らざる者になるので、之を第三性と云ふのである。ブラシユコーと云ふ人の所に居た女中が習慣として賣淫をして居たが、數年の後には男になつて了つた。即ち乳が男子の夫の如くに小さくなり、聲は男の如くに太くなり、其のみならず上肢と下肢とも男の其と同様になつて了つた。之を詳しく話せば此外に種々の特點があるが、極く劇しく賣淫を行へば本統の男になるのである。そして尤も恐るべきは此く第三性になつた女は決して懷妊せぬ事になるが故に、社會上から云つて非常な害惡となるのである。故に第三性の女が多くなれば

人民は益々減じて國民は遂に亡びる。其れのみならず假へ第三性の女から稀に子を産むることがあつても、此に非常に悪い性質を與へるのである。其外の害を數ふれば放淫なる生活をするに忍耐力が無くなつて性慾を制裁することが出来なくなる。精神上意志が薄弱となる。生活のエネルギーを消耗し、一般に人間の羞恥心を減ずるのである。是は皆遊廓が社會に與へる害である。今世間幾萬の人間が變性しつゝあることを考ふる時は實に寒心すべき事であると思ふ。

### 變性は進歩に非ず

人間は古代に於ては獸の様に四足で這つて居たに違ひない、然るに追々進歩發達して何時か立つて歩く様になつた。今日の足の指手の指などは皆獸の時代の遺物である動物であつた時には食つた物を長く腹の中に持つて居なければならなかつた故に胃と腸とが出来て其が又非常に長い。然し人間が今日の様になつてからは胃も腸もこんな

に長くは要らぬ。故に胃を除くか、腸の一部を除つても人は死なない、彼の盲腸は人が獸で居た時には非常に役に立つたが、今では何の役にも立たない。斯くの如くに人間は其境遇に應じて益々適應する様に發展して行く。此が即ち進化である。變性は此の進化とは全く異つて居る。人間が發達して行く中に不謹慎な不自然な事をするに通常一定の型から離れた物が出る。之を變性と云ふのである。娼妓の變性は決して少くはない。此の變性者が増して來ると國民は亡びる。娼妓なる者も之を祕密に行はば變性者を出すことも少いが、政府が公然許可を與へて行はしむるに至つては其害は愈々多いのである。私は此の意味に於て絶娼論を唱へる。西洋の醫者は檢微法は不備であるから娼妓を廢せと云ふ。私は其も勿論であるが、其外に此の變性の畏るべきを見て茲に絶娼を唱へるのである。

# 醫學上より觀たる公娼制度

醫學博士 三 戸 時 雄

## 一、習慣と公娼制度

廢娼問題が近來可なり世間の注意を惹く様になつたが、それでも人權、保健問題を口にする人から眞面目な議論を聞くことが未だ少い、それで自分は自分の論據を擧げて社會に訴へて見たいのである。

元來何故十年前迄は世間の視聽をひく問題とならずに一部人士の氣まぐれか、又は賣名演説の標題位にししか取扱はれなかつたかと云ふことを考へる必要がある。今日未成年者の禁酒禁煙法すら在る世の中で官許の賣淫制度が存在すると云ふことは自分には不可解の社會事象だ、最近新聞紙上で廢娼問題は警察が犯人檢舉の便宜の爲めに遊

廓の存置を主張してゐるから困難だとの事を見たが、犯人檢舉の爲めに道德と保健とが犠牲に供せらるゝなど、云ふことは随分面白い問題だ。同じく賣淫に依つて生活する人間でありながら、公娼は差支へがなく私娼は不可いと云ふ判断がどうして附くだろうか、官廳が許可したら公然と賣淫をやつて良いとは可なり分らない判断だと思ふ。自分は此問題を習慣と道德と衛生との三方面から考へて見たい。

第一習慣から考へて見たい。習慣から考へるには歴史が必要だが不幸にして自分は公娼の歴史を知らない。兎に角吉原が鳥原の模倣である事は事實らしい。鳥原の前に福原があることは勿論である。福原となると白拍子を想起する譯で鎌倉時代の白拍子の地位は丁度朝鮮の官妓の様なものかと思へる。吾人の眼で朝鮮の官妓制度を見ると可なり變なものだ。白拍子は實に征夷大將軍の前で唄つたり舞つたり、神様の前で歌つたりした。未だ他の事もやつたらしい。上の行ふ處下此を倣ふで大將軍のやる通りを武士や百姓が眞似て漸次に福原や鳥原の様な者が出來たのだらうと思ふ、(こじつけ

かも知れない。)徳川時代の武斷政治が町奴を産んだ様に權力政治が社會制度に色々の變態産物を生ずるのは事實だらう、とにかく古い因縁のある代物で其の時代には今の様な本能だとか保健だとか取締りだとかの理屈は一切抜きで、只商賣繁盛を目的に便利な様に賣淫者が集團したものだと思へる(徳川時代に取締の必要で集團せしめた様になつて居るが、此は散娼を集めた方が營業上の便利だとして巧利の經營者から願出て幕府から吉原の土地を賜つた事になつて居る。)

公娼の發達史と之に對する法律の變遷とは密接の關係があるが其詳細は知らない。法律が其の時代の社會に適當する様に變化して行つて居るから、其の時代の法律では凡て公娼を是認して居たものと思へる。しかし法律が道德の標準でない限り法律が許しても道德や習慣が許さない事象が存在するのである。法律の變化と道德標準の變化とが常に一致して行かない限り此の矛盾は仕方のない問題である。習慣の力は恐いもので習慣の前には時に法律も道德も其威力を潜めることがある。

日本には面白い習慣があつた。殿様が何人蓄妾しても問題でないが輕輩がやると不

身持だとして處分せられた。人の命を平氣で取上げる殿様が家來の女房を取上げても人民共は孝經と論語から身を縛られて居ねばならなかつたのだ。此と同じ様に今日でも年寄が若い者に「商賣人なら買つても良いが」と言つて居る。かう言ふ思想が何百年間祖先から遺傳的に傳つて居るので今日多くの人は此の一言を是認して居る。しかし今日の青年の頭では到底是認出来ない問題だ。

人智未開の自然人の間では今日でも猶男女とも全裸體で日中歩行して居る種族がある。此は彼等社會の習慣で差支へないのである。日本でも今日展覽會に全裸體畫（筋肉は静止状態で無表情の顔貌だが、若し働作して居る場合には陰部は掩つてある）が出て人も人が咎めない様になつた。此も習慣の力である。しかし臓器の機能状態を描寫した春畫に對しては醜怪なるものとして吾等は其公開を拒む者である。又吾等は自分の前で鼻孔へ指を入れて居る人を見ると非常な不快を感じないわけに行かない。電車の中で痰を吐いたり手放して咳嗽をする人を見ると自分は一種の生存上の脅威を感じるのである。

である、社會上今日の習慣では交接動作は絶対秘密のものであつて、其暗示すら他人に與へてならないものである。春畫が公開美術でないと同様に娼妓や遊廓が社會の表面に存在して居ると云ふことは吾人の善良なる習慣に反したものである。吾人は遊廓や娼妓を、公衆便所が都市に必要なが如くに都市の必要物件と考ふることは出来ないものである。

## 二、道德と公娼制度

第二に此問題を道德上から考へて見度い。今の處貞操とは女子に課せられた義務であつて、自然姦通なる文字も女子の道德を云々する場合の言葉であつて男子には適用されない様に解せられて居る。夫の姦通と言ふ事は日本のみならず世界中で未だ法律上の問題となつて居ない（離婚の理由となる他には）此などは人種平等だとか人類の共存共榮だとか言つて新しがつて居る世の中でありながら、腕力の強者である男達の

自分勝手な判斷に基くものだと考へられる。

一部の論者は血統が大切だから妻の姦通を許容しないのだと言ふが、血統尊重の意味から言へば子孫に對しては夫婦とも同等の責任があるべきで、女は何でも良いわけでない限り女に向つて課せらるゝ責任は男も負擔すべきであらう。血統を極端に保護せむとする思想から行けば男は貴重なる種子の一箇も他へ分與してはならないのである。實に種馬の如くに自重せねばならないのである。いづれから言つても血統尊重問題から見れば男は女よりも、より貞操堅固でなければならぬ。或は血統論者の眞意は家名存置にあるのかも知れない。さうでなければ何故血統と無關係な養子制度があつたり、又は私生兒を庶子に昇格せしめて其者に家名を譲るなどと云ふ不必要な手數のかゝる制度が存在するのだらう。自分には自家撞着の制度とより考へ様がない。

有り難い事には日本人種は異人種に征服せられたことがないから奴隸の味を知らない。自然對他的に民族としての團結心が薄い。米國の排日問題で民族闘争の第一歩を

踏んだが悲しいことには國民全體としては他人の頭を蜂が刺した程にしか思つて居ない。とても之では、今後の世界に雄飛などは思ひもよらない。自分の考では奴隸の味を知つて居る日本人は娼妓でなければならぬと思ふ。

法律上では娼妓がどんな風に取り扱はれて居るか知らないが多分は契約労働者か、賃貸業者か又は商品とでも見てあるのだらう。現在法では醫療の目的でも人間の皮膚や血液を販賣する事は出来ない位だから娼妓が期間を限りて自己の肢體の一部分の所有權を放棄又は賣却したと見る事は出来ない筈で自然商品と解釋する法理はあるまい。次に賃貸業者かと云ふに此爲めにはどうしても肉體の一部分を非生活體として取扱はねばならないから之も出来ない解釋だらう。されば純然たる労働者かと見るに單に労働力を販賣した者とも見られない。自分には娼妓は一種の器具——即ち他の労働者が労働力を機械力に變化する爲めに使用する所の人工的器具とは異なる處の、破損しても其代用物を再造することの出来ない——器具を第一に賃貸して、其器具の運用に關し

て自己の勞働力を販賣するものであつて（此特種器具の運用に付ては所有者以外の他人が勞働力を提供しても器具の效果を見ることが出来ない）自然器具と勞力とは不可分の者であつて實に賃貸業者と勞働者とを合併した者が娼妓であると思へる（按摩が多少似た商賣だ、此外に類似はない。）然し前に言つた様に賃貸業者と見ることは不合理であるから、先づ此器具の解釋のことは論じない單に勞働者と見て置いて。さてどうかと考へて見度い。若し娼妓が單一なる契約勞働者であつたら彼等は勞力を提供する時間があつて其間は束縛を蒙るのは止むを得ないが、其他に於て必ず自由時間を有すべきであると思ふのである。しかし彼等は金を以てしても自由時間を購ひ得ないのである、（同じく淫賣業者である藝者は金で購ひ得る自由時間を有して居るのである。）娼妓は假りに警察の許可を得て廓外に出られるとしても毎日散歩に一々警察へ行けもしない。娼妓も人間である。他人の享樂を袖手傍觀は出来ない。矢張り毎日淺草や道頓堀へ行きたいに違ひない。然し此は出来ない話なのだ。つまり吾人が飼犬を鎖で縛

てると同様で娼妓は非常な自由束縛を受けて居るのである。同じく淫賣常習犯者たる藝者がなせ公開の宴席へ出たり又は平氣で市街を歩けるだらう。私娼は賣淫現行犯を罰せらるゝが其他の日常生活は自由である。娼妓は其逆である。つまり公私娼の間には非常な不公平な取扱があると思つて良い。此點で確に娼妓は奴隸である。古來私娼が絶滅せられた歴史がない。大都會の眞の一部分で私娼を絶滅したとて他の廣い部面に散娼として残れば決して風俗や道德の改善向上に役立たないのである。私娼絶滅が困難ならば、二重制度の公娼を社會の表面に存在せしむる必要はないのである。

猶一つは娼妓は相手に對して選擇權を有して居ない。私娼でも藝者でも自由意志による選擇權を有して居る（限局性ではあるが）現在の社會を支配して居る道德觀念に於て婦人の陰部は殆んど婦人の全人格である。かく迄に大切な機關の使用に對して娼妓は強制使用を課せられて居ると云ふ事は、已に人として取扱はれて居ない證據で奴隸か若くは非生活機關として取扱はれて居るのである。一部論者はよく言ふが、娼妓は



始めに娼妓の行ふべき義務に就て説明せられて、凡てを承知して居るから差支へない。此は一度娼妓の經歷を有するものに向ては適合するが年少拾八歳以上のものが強制姦淫の耻辱と自由束縛の苦痛とを理解する筈はない。或は又家族の生活の爲めに犠牲となれるものだとの言も人情的には美しく聞えるが此も一の諦めの辭柄である。若し彼等の欲する金額が他の方法で得られたならば彼等は決して淫行を目的とする娼妓を選択しないのは明なことだ。此の爲めに自由廢業制度があると云ふけれども已に失はれたる處女性や貞操は到底回復の方法はないのである。道德と法律とが極端に保護せんと期して居る貞操問題は娼妓に對しては全く省みてないので此は明かに人道と法律との自己破壊である。矛盾も甚しいと言はなければならぬ。金を獲得させることが目的なれば私娼でも差支へはない。社會教育の點から言つても白晝公然淫行を行ひ得る場所の存在する事を公衆に教示する遊廓——殊に其が壯麗なる特殊建造様式で吾人の目前に臨む場合に——などは社會から一掃して仕舞はねばならぬのである。

或は遊廓を非常に不便な位置に設けて、樂に行けない様にしたらと云ふ論者もある。自分も或は現在の刑務所の様に作つて一定の入場券を拂つた眞の需用者のみが入る様にして、素見客は入れない様にしたらばとも考へたが、しかし此は遊廓廢止に至る迄の階段として、耻を知るものはかゝる所へ出入してはならないと云ふ教養手段としては幾分有效かも知れないが、共に不徹底であつて遊廓が在存する以上は此等の方法で何程風儀が矯正せらるゝかは疑問である。

次に公娼を廢止すると私娼が跋扈したり、私通、強姦等が殖へたりして社會の風儀を甚しく亂すと心配して居る人がある。公娼を有しない群馬、和歌山、兩縣に於て過去幾年かの知事や警察部長が交迭しても永年に亘つて此等の人が公娼設置を斷行しない處から見れば、夫れ程の風儀上の問題は無いと考へられる。よし公娼がない爲めに社會の風儀が亂れたとしても夫れは私娼の罪ではなくて社會全體の教養が足りない爲めである。倫敦、巴里の例を引く人があるが、此兩地の賣淫は流浪の外國人で彼等に戯

れる者も亦無耻の外國人旅行者であつて其國人は兩者共に與る處はないと言つて居る義務教育と公娼の二制度を有しない英國人は世界中で尤も質實剛健なる國民性を有して居るが、此二制度を併有して居る獨逸人は決して英國人に優る善良なる風儀と性質とを有して居ないのである。昔我國で責任の爲めに腹を切つた者は（たとへ夫れが愚直に過ぎたと考へられても）武士の階級のみであつた。風儀を云々する人は國民性の教養と云ふことを何時でも念頭に置いて議論をしなければならぬ。

も一つ大切なことは一國風儀の模範たるべき社會の上流に立つ人が公開の儀式などに藝者を侍らしたり、政治家が待合で藝者の酌で國政を議したりしてどうして一國の民風を作興せしめることが出来るだらう。社會の風儀取締官が淫賣業者の表彰式の様な（太夫道中）なるものを何故許可するのだらう、國民の教養を云々する人は其指導者の頭からして作り換へてやる必要のあることを考へねばならぬ。

### 三、衛生と公娼制度

第三に保健衛生の點から言ふと今日迄の統計では遊廓へ赴く者は二十五歳以下の者よりは三十歳前後四十歳迄の者が多いとの事である。一部の論者は此統計からして帶妻者に不品行者が多いと判斷して居るが、自分はさうは考へない。二十歳前後の者は克己心が強烈で資力も不十分な爲めに不品行者が少いので、三十歳前後の者には酒の機會が多くて酒の爲めに克己心が麻痺するのと、資力がある爲めだと思ふのである。いづれにしても國民として生産能率の高い壯年者が遊廓がある爲めに、遊興の爲めに時間と財産とを消費して花柳病に罹ると云ふことは非常な損害である。少くとも遊廓がなければ彼等の過半数は遊廓の地を踏まずに音楽堂か何かで短時間の享樂で終る者だと思ふ。社會制度上公娼の存置が必要なれば遊廓では一切の飲食を禁じて只生理上の本能満足を以て終はらしむる様にした方がよい。遊興費も賣淫のみを目的とするこ

とになるから非常に低廉になる。遊廓に於ける飲酒を嚴禁するだけでも國民の保健に貢献する處甚大な者がある。どう考へて見ても公娼を監禁する爲めに彼の宏壯なる建築物の集團たる遊廓なる者を存置せしむる必要はないのである。

次に花柳病傳播と言ふ點から考へると、投資した人には自由廢業若くは逃亡と言ふ脅威があるから危険な商賣である。それでなるべく危険前に投資額を回収する様に娼妓に労働能率を高めしめる様になるのは止むを得ない。自然的に保健上では危険率が高まるのである。檢査制度があつても毎日檢査するのではないから殆んど意味を爲さない。日ではなくして時間的に無意味である。國民保健の點から言ふと淋毒よりも梅毒が恐るべきであるが、一週一二回の檢査で微毒が防げる筈はないのである。

公娼を廢止すると私娼が跋扈して花柳病が殖へると云ふ論者がある。かゝる論者は花柳病が殖へるとの統計的論據を何によつて得たであらう、日本で殆ど公娼を存しない三四縣で他府縣より花柳病患者が多いと云ふ事實が假りにあるかも知れない。さう

だとしても之を信するには必要な前提が要るのである。第一に絶對數でなくて人口比例であらねばならない。第二には各縣で全人口に付て檢診した結果の數字でなければならぬ。花柳病専門醫の届出數だけを信するなどは無意味である。第三に患者の多い縣の教育程度と男女人口比例を考へねばならない。第四に患者の多い縣の私娼取締法の寬嚴を他府縣と比較せねばならない（公娼のない縣では私娼取締が寬大ではないか。）とにかく患者が多くなると云ふ豫斷の下に公娼存置を是認するのは輕卒だと思ふ次に花柳病患者が殖へると云ふことを恐れて公娼存置を主張することが暴論であると思ふ云ふことを他の方面から説明したい。公娼がない爲めに花柳病患者が殖へるから此等の人間を救はんが爲めに公娼を設けるとしたら、其公娼なる女は花柳病に對してどうなるかと云ふことを考へればよいのである。即ち一部の人を救はんが爲めに犠牲的に公娼になる女は花柳病に必ず罹るのである。即ち甲の花柳病を防がんが爲めに乙の花柳病にするのである。數の上から言つても一旦娼妓になつた人間が一生涯娼妓で終は

るのではなくて年々歳々新に公娼となる者が出るから新たな患者を作るのである。つまり數の上からは程度の問題である。或は公娼は無料診療せらるゝから差支へがないと云ふかも知れないが此は人を斬て治療代を拂へば差支へがないと云ふのと同様である。まして淋疾の爲めに心臓内膜炎で落命する事もあり不妊症にもなるから無料診療位ではとても申譯にならない。或る人は娼妓などになる人間はそんな六ヶしい事は何も知らないから別に苦痛でもあるまいと言つて居るが甚だ人類愛の欠けた話だ。とにかく何かの理由で公娼存置を主張する人は自分の妻なり娘を自分の主張する理由だけで娼妓にすることが出来るかどうかを考へて見たなら直様理解が付くのである。自分の娘にはさせたくないが他人の娘なら差支へがないなど、云ふことが人間の皮を被て言へた義理の者ではあるまい。

自分は嘗て高等學校の入學體格検査をやつた時に、約一千人の受験者の中に十四五人の生新しい淋疾患者があつたから其動機を聞いたら、凡てが都會に出て罹病の機會

を得たのだと言つた。遊廓さへなければ、かゝる悲惨事は起らないのである。

序だから一言して置くが、人口六十萬の京都市が有する全遊廓で一年間に雲散霧消する遊興費が三千萬圓だと推定せられて居る。京都市一年の經常費が一千萬圓で、三萬噸の巡洋艦が三千萬圓と聞いたら彼此比較して驚くの外はない、此外に元來藝娼妓などになる連中は自分の親の許に居たら恐らく木綿着物許りで銘仙もむづかしい連中だらうが、夫れが一年間に幾枚と云ふ非常に高價な絹織物を消費して行くのである。其上に遊興の間に濫費せらるゝ酒（酒は米から作られ、其米は今日内地産額のみを以てしては日本の全人口を養ふには一割の不足を呈して居るのである。かく貴むべき米から作らるゝ其酒）量は莫大なものである。此絹と米との濫費を考へて貿易表を一見する時は自分には邦家の將來が寒心に堪へない。經濟的にも遊廓や公娼の存置は一の理がない。

獨逸の「ハンバーク」「プレートメン」「プレスラウ」に公娼があつて「ベルリン」には無い

これは一に「カイゼル」夫人が承知しなかつた爲めであるが「ベルリン」では其爲めに行  
政的に何等の不都合を感じないのである。諸他の理由は別として只一つ、淫行を祕密  
に保ちそして個人の自由を尊重すると云ふだけで公娼は是非廢止すべきであると思ふ  
殊に體面を馬鹿に氣にする小膽な日本人が、平然として公娼を有すると云ふことは、  
理性の力を麻痺せしめた習慣力の恐ろしいのに驚く他ない。吾人は明治五年新律綱領  
に於て、娼妓解放を斷行した當時の爲政者の勇氣と理解とを回想して感慨に堪へない  
次第である。終りに一言しておき度いのは、自分が本論を唱へるからとて決して私娼  
推奨者ではないことである。

昭和二年二月二十四日印刷  
昭和二年二月二十六日發行

定價金五拾錢

東京市小石川區大塚仲町四一

編輯兼發行人 伊 藤 秀 吉

東京市小石川區大塚坂下町一三六

印刷人 内 田 柳 次 郎

不 許  
複 製

東京市小石川區大塚仲町四一

發 行 所 廓 清 會 本 部

終

